１．はじめに

『学生団体 福島大学災害ボランティアセンターを振り返り』

顧問（行政政策学類）：うつくしま未来支援センターボランティア支援担当
鈴木典夫

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災以降、福島大学の学生たちは様々な被災者支援の活動を行っていた。大学に開所した避難所運営を行った学生たち、福島市最大の避難所となったあづま総合運動公園体育館を支援した「福 LOVE」の学生たち、以前から震災ボランティアの経験を持っていた学生ボランティア団体「Key's」の学生たち、そして宮城で、岩手でボランティア活動に参加した学生たち、被災地外の帰省先で福島を応援しようと立ち上がった福大生たち。

5 月に入り、学生たちが 1 か月遅れで福島に戻ってきた。もう既に前段であげた多くの学生たちが経験を積んで帰ってきた。経験を積んだ学生以外にも「何かしなければ」と焦る気持ちで 2 か月を過ごしていた学生も帰ってきた。福島は原発事故により、被災者支援・被災地復興のプロセスは過去とは全く違うものになることは当初より感じられていた。福島の支援ニーズは「被災地大学」だからこそ、日常の中から次々と汲み上がってくることもわかっていた。福島大学の中に様々な活動グループが立ち上がることもわかっていた。全国から「何か一緒にやりたい」という人々が声をかけてくることもわかっていた。そんな学生の気持ちや全国からの支援の受け皿となり、コントロールするセンターが必要となることは 3 月の段階で一部の学生たちには伝えていた。これまで福島大学の先輩たちが中越地震等で行ってきた、定点型の被災者支援・地域支援、一員として参加するネットワーク型で対応するのではない、全体性をもったボランティア活動が今度の「福島大学」には必要とされた。

5 月 1 日、学生団体「福島大学災害ボランティアセンター」は起ちあがった。その活動目標は、①被災地現場での復興支援活動、②避難所での生活支援活動、③仮設住宅での生活支援活動、④放射線被害による生活（不安）改善活動、⑤災害に関する各種調査活動への協力、⑥災害援助及びその活動に関する情報提供、啓発活動、⑦災害に関する学習研修活動、⑧災害復興のイベント企画（ふくしま元気発信活動）、⑨県内外学生災害ボランティアに関するネットワーク活動、⑩災害に関する他大学・他団体との共同活動、⑪福島大学が行う災害に関する各事業への協力、を掲げた。

これらの柱のもと、この 10 か月間は走りっぱなしだった。

●被災地現場での復興支援活動

・新地町、相馬市、南相馬市、いわき市などの災害ボランティアセンターを通したニーズ

対応活動（瓦礫の撤去、土砂の撤去、避難所の運営補助、思い出探し、花植えなど）
・新地町での塩害被害農地の再生活動（綿花栽培）
●避難所での生活支援活動（～閉所まで）
・郡山ビックパレット避難所における足湯活動
・福島市あづま運動公園体育館避難所での誕生会活動・炊き出し活動
●仮設住宅・民間借り上げ住宅居住者との生活支援活動
・高齢者等の訪問活動（井戸端訪問）
・仮設住宅での足湯活動
・交流スペースを使った住民交流活動（サロン・バーベキュー・芋煮・餅つき・望年会等）
・高齢者サポート拠点での健康づくり・介護予防サポート活動
・仮設住宅での炊き出し活動
●放射線被害・不安軽減活動
・飯舘村への支援
・学習センターへの「ひまわりプロジェクト」
●子ども支援
・放射線不安からの園外活動の自粛保育所の遊び支援
・読み聞かせ活動
・こどもサマーキャンプ（三重）、ウィンターキャンプ（長野）(予定)
●義援金活動
・福島大学避難所物資によるフリーマーケットの開催
●他イベント参加協力等、羅列以外の活動も多数

また、福島県大学ネットワーク「ふくしま復興支援学生ネットワーク」の運営も核となる活動になっている。福島学院大学・郡山女子大学等々、復興にかける思いと支援活動の方向性の共有化を図り、活動のハウツーを伝達し、各大学独自の活動を補完し合い、仲間としての交遊を図ってきた。今後はこのネットワークを活用した活動の協働化を視野に入れたいものだ。県外でも、明治大学・大阪国際大学・愛媛大学・京都府一円の大学等々、かなり多くの大学との協働やコーディネートを災害ボランティアセンターは行った。大学間に留まらない。NPO 法人・企業・ボランティア団体との協働やお誘いでの活動参加も数多い。学生たちは、文部科学省「生涯学習フェスティバル」の分科会を主管したり、福島県中小企業同友会での提案等、様々なシンポジウムなどで福島からの声を発信してきた。その他、被災地連携で千葉県浦安市との相互物販、南会津水害支援、和歌山・三重水害支援・・・。とにかく走ってきた。

でも、1 人で突っ走って来たわけではない。個人・団体・企業・行政・大学から多くの支援と助言をもらい、本当にありがたい。大学（生）ではできないことはたくさんある。復興は支え合い、ボランティア活動そのものも支え合い。本当に感謝している。

これからは、故郷を離れた人々の関係性を形づくるために（コミュニティ支援、コミュ

ニケーション支援)、個々の生活不安を軽減するために（高齢者の見守り・介護予防、子供たちのストレス軽減・健康配慮)、福島の元気を発信する活動に、また走り出そう。学生たちはいずれ福島大学を巣立っていく。でも福島の道のりは長い。今、小中学生の子供たちが、福島大学に入ってきた時は仲間として、復興の活動を続けられればと思う。だからこそ、福大の学生の姿を多くの人々に見てもらい、見守ってほしい、叱咤激励してほしい。

『初代センターマネジメントチームとして』

福島大学災害ボランティアセンターセンターマネジメントチーム：
人間発達文化学類 4 年　伊藤航

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、私はこの日、この瞬間のこと、そして、その後から始まる生活を決して忘れることはないでしょう。

この日を境に多くの人たちの人生が変わりました。私もその中の 1 人だと思います。本当ならば翌 12 日は東京で最終面接を受けるはずだった。それが終われば、卒業する先輩たちの門出を祝うはずだった。4 月からは大学生活最後の 1 年を最上級生として過ごし、何事もなく卒業を迎えるはずだった。しかし、自分が想像していた生活を送ることはなくなりました。

私はあの瞬間を福島大学構内にある学生寮で迎えました。今までに体験したこともない揺れに襲われ、それから間もなくショッキングな津波の映像を見ました。そして翌日には、福島第一原発で原子力事故が発生し、放射線という目に見えない恐怖に怯える日々が始まりました。

その時の私は、とてつもない不安と同時に、大きな虚無感にも襲われました。それは「自分より苦しんでいる人がいるのに、その人たちの力になることができない」「自分の力・存在は何の役にも立たない」と、自分に対する悔しさが込み上げてきたからです。そんな状況の中、私のもとに「福島大学が避難所になる。それに伴って学生ボランティアを募集している。」という話が舞い込んできました。私は迷うことなくその避難所ボランティアに参加することを決めました。

そこからはまさに「突っ走ってきた 1 年」だったと思います。避難所ボランティアへの参加、福大ボラセンの設立、センターマネジメントチーム就任、泥出し作業、仮設住宅支援…ここでは挙げきれないほど多くの活動に参加してきました。もちろん、途中で投げ出したくなったことも何回もありました。ここまで自分がここまでがんばる必要があるのかと悩んだこともありました。しかし、その度にある思いを忘れないようにし、この 1 年間を過ごしてきました。

私を活動に駆り立てたのは、「困っている人の力になりたい」という思いです。福大避難所に初めて足を踏み入れた時、津波被害を受けた地域を初めて見た時、仮設住宅に初めて行った時、必ずこの思いが込み上げてきました。そして、福大ボラセンには私と同じような思いを持った仲間がたくさんいると感じています。その仲間たちと過ごした時間は私にとって貴重な経験であり、かけがえのないものとなりました。「福大ボラセンで活動してよかった」と感じている学生は私だけではないはずです。

そしてもう 1 つ、私を活動に駆り立てる思いがありました。それは「初代センターマネ

ジメントチームとして、後輩たちに何かを残していく」という思いです。この役職に就任した際、これまで誰も経験したことのない大災害、そこからの復興の力になるための組織のリーダーとして自分に何が残せるのか、とても悩みました。そして私が出した答えは、「福大ボラセンを名のある団体とするための基礎を作る」というものです。震災から 1 年が経とうとしていますが、依然復興の兆しは見えません。それどころか、いつになったらゴール地点にたどり着けるかも全く分からない状況です。このような状況に陥ることはある程度は予想できていました。だからこそ、私たちにはボランティアを熱やブームで終わらせるのではなく、長期的な視点に立ち、避難している方たちに寄り添った支援を行う必要があると考えました。そして 10 年後、20 年後に「あの時、福大ボラセンの人たちがいたから元気になれた。」「福島大学の学生に助けられた。」という声があがればいいと思います。たとえ地味な活動でも、長期的に行うことが非常に重要です。私はその長期的支援のスタート地点としての役割を全うしよう、このような思いを持っていました。

センターマネジメントチームとしての役割を後輩たちに譲り、卒業を迎えた今、私は以上のようなことをどこまで達成できたのか考えています。私の力不足のために、後輩たちに誤解を招いたことも、きつい言葉を浴びせたこともありました。今になって思うと本当に申し訳なかったと思っています。しかし、すべては福大ボラセン、そして目の前にいるその人が活動を通して成長してくれたらと思っての行動でした。実際、自分の気づかないところで成長していく後輩たちの姿を見るのがとてもうれしく感じていました。この場をお借りして、迷惑をおかけした皆さんに謝りたいと思います。本当に申し訳ありませんでした。

私はこの春で卒業してしまいますが、これから先も福大ボラセンの活動は続きます。そして今年度以上に、避難している方々から必要とされる存在になることでしょう。今後ともご末永いご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、この報告書には私たちの今年度の活動のすべてが記載されています。今後も続く長期的支援のスタート地点としての活動の記録です。ぜひ最後までご覧になってください。

『無限マラソンに挑戦するためには』

福島大学災害ボランティアセンターセンターマネジメントチーム：
人間発達文化学類３年　安達隆裕

東日本大震災から 1 年が経とうとする今、福島はどのように変化したのでしょうか。今までにない津波被害、終息する兆しの見えない原発問題、多くの問題を抱えたまま私たちはこの福島で生活を続けていきます。

震災当初、直面したことのない現実が一気に襲いかかり、日常は簡単に崩れてしまいました。電波の混雑により連絡も取れない、電車も動かないことから実家へ帰ることもままならない。しかし、みんなが不安を抱える中でも、誰から声をかけるわけでもなく助け合おうという行動が多く見られました。Twitter などを用いて正しい情報を探して発信しようとした人、食べ物が余っているからと分け与えてくれた人、率先して水を汲みに行った人、情報を集めるために外へ出かけた人など、私はここにボランティアのあるべき姿があるのではないかと思います。

学生の大体は震災に対する支援活動の未経験者でした。春休みから避難所運営に携わっていた学生、学校が始まってから確固たる意志を持って加入してくれた学生、活動の様子を聞き参加してくれるようになった学生。ボランティアという世界に触れるタイミングが異なるだけであり、福大ボラセンはボランティア経験の有無を問うことなく、「福島の復興のために何か力になりたい」、「自分にできることはないだろうか」という意思を持つ学生で構成されています。地域福祉の観点や、ボランティア経験のない学生ができることはなんだろうか。この１年はずっとこの疑問に追われ続け、走り続けてきました。どのような形の支援が正解なのか、震災当初からよく耳にする復興とは何をもって復興なのか、そして、この活動の終着点とはどこなのだろうか。深く考えてしまうとずっとその悩みから離れることもできず、それでもニーズが挙がり、そのニーズも変化し、学生の本業も疎かにはできない。私だけに限らず、震災以降ボランティア活動に取り組んできた学生はみんなこの悩みを抱え続けながら活動に参加してくれていたと思います。

このように書いてしまうと苦労しかなかったように思われてしまいますが、私たちがここまで活動を継続できたのにもきちんと理由があります。悩みながらでも起こしたアクションを享受する側から、「ありがとう」と言われるだけで不思議とその悩みは消えてしまいます。偽善という単語はもう聞かなくなりましたが、ボランティアをしようと思った気持ちはみんな本心からです。他人の目を気にすることなく取り組めたのなら、自己満足ではないだろうか、活動を継続する中で、みんな一度は考えたことがあるのではないでしょうか。既述しましたが、私たちの活動の終着点はいまだに見つかりません。無限マラソンをしているような感覚に陥ってしまいます。しかし、活動に着手する中、手を差し伸べる側

である私たちが避難していらっしゃる方から元気をもらい、またそれを糧に新しい活動を展開していく。境遇を簡単に片づけることはできませんが、ボランティアは友達と一緒にいるような、そういった人と人との関わりと変わらないものではないかと思います。前例がない１年であったために、みんな大変な思いもしながら活動をしてきました。それでも、ボランティアに参加しなければよかったと思う学生はいないはずです。

以降に続きますのは、私たち福大ボラセンの１年の軌跡です。無限マラソンであろうが、良かれと思う気持ちは偽りのあるものではなく、その勢いこそ、学生である私たちの強みではないでしょうか。その勢いで作り上げた笑顔と実績に、また、それに関われたことに私は誇りを感じます。冒頭で、福島の何が変わったのかと記しましたが、「助け合おうとする人が増えた」と私は思います。復興は私たちだけで成し得るものではありません。他にも同じような悩みを持つ団体もいるでしょう。各々に答えを見つけ、先の見えない点より一歩進んだ所に、みんなで辿り着けたらなと思います。

2.　福島大学災害ボランティアセンターの成り立ち

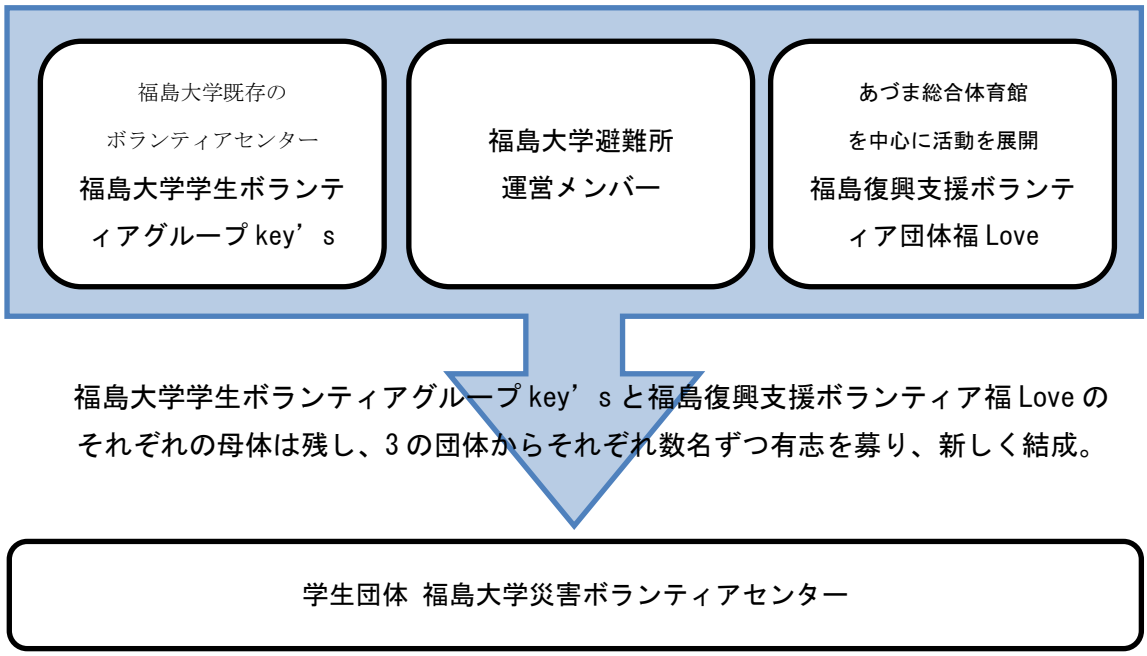
【福島大学災害ボランティアセンター設立の背景】

福島大学災害ボランティアセンターは、東日本大震災を受け、福島大学の学生有志と教員で設立された団体です。

福島大学は、2004 年 10 月 23 日に発生した中越地震や 2007 年 7 月 16 日に発生した中越沖地震の災害の際に、福島大学の学生有志と教員で構成された「災害ボランティア」において 100 人単位で新潟の被災地にボランティアを派遣していました。また、中越沖地震の翌年、2008 年 6 月 14 日には岩手・宮城内陸地震が発生し、その際には「福島大学学生ボランティアグループ key's」と名前を変え、福島大学既存のボランティアセンターとして現地にボランティアを派遣し、震災復興活動に携わっていました。

そして東日本大震災においては、3 月 16 日に福島大学が避難所として指定され、福島県の浜通りから避難して来た方々を中心として受け入れるようになりました。そこでは、福島大学 30 人の有志が集まり、福島大学の避難所が閉所される 4 月 30 日まで「福島大学避難所運営メンバー」として活動していました。また、同時期に、福島市の西部に位置するあづま総合体育館も避難所に指定され、そこでも福島大学生を代表とした「福島復興支援ボランティア団体『福 Love』」という団体が立ち上がり、同じく避難して来た方々への支援活動をしていました。

そうした福島大学生を中心としてボランティア活動に取り組んでいた、「福島大学学生ボランティアグループ key's」と「福島大学避難所運営メンバー」、「福島復興支援ボランティア団体福 Love」の 3 つの団体が、5 月 12 日からの大学講義再開と同時に、それぞれの団体のさらなる有志が集まり、「災害ボランティア」に特化した形として「学生団体福島大学災害ボランティアセンター」を設立しました。



【学生団体 福島大学災害ボランティアセンターの目的と現在】

福大ボラセンは、東日本大震災によって被災した方々への支援活動を行うこと、その支援活動をしたい福島大学生の受け皿となることを目的として設立し、主に以下の活動にこれまで取り組んできました。

- 被災地現場での復旧支援活動 （がれき撤去など）
- 避難所での生活支援活動 （物資配給、炊き出しなど）
- 仮設住宅での生活支援活動 （物資配給など）
- 避難所・仮設住宅の避難者とのコミュニケーション支援 （足湯など）
- 放射線被害による生活改善活動 （ひまわりプロジェクトなど）
- 災害に関する各種調査活動への協力
- 災害援助及びその活動に関する情報提供、啓発活動
- 災害時要支援者サポート （子ども・高齢者・障がい者支援）
- 災害に関する学習研修活動
- 災害復興のイベント企画 （三重サマーキャンプ、縁日イベントなど）
- 学生災害ボランティアに関するネットワーク活動
- 災害に関する他団体との共同活動
- 被災地連携活動 （明治大学との共同支援活動）
- 福島大学が行う災害に関する各事業への協力
- その他、センターマネージメントにおいて適当と見られる活動

現在の福大ボラセンは、24 名の運営メンバーとボランティア情報などを受け取る一般登録メンバー241 名で構成され（2012 年 1 月 30 日現在）、福島大学にある全学類の学生が関わっています。

運営メンバーは、1）センターマネジメントチーム、2）支援活動企画チーム、3）総務チーム、4）活動資金管理チーム、5）情報運用チーム、6）プロジェクト企画チームの 6 つのチームにそれぞれ担当で分かれて活動しています。また、運営メンバーと一般登録メンバーともに、福大ボラセンのメーリングリストに登録し、活動ごとに参加を呼びかけては避難所や仮設住宅を中心として現地に赴きました。

- センターマネジメントチーム…各チームの総括。活動方針の決定。渉外活動。
- 支援活動企画チーム…支援活動の具体化。活動当日のチーフ活動。
- 総務チーム…センター運営庶務・事務。資材調達や貸借物品管理、維持管理。
- 活動資金管理チーム…義援金活動及びセンター活動資金調達。経費出納管理。
- 情報運用チーム…センター登録受付管理。対外的広報活動。ブログ・記録管理。
- プロジェクト企画チーム…復興イベントの企画運営、渉外。

2011 年 11 月 1 日には新体制が発足しました。それに伴いスタッフ組織の改編が行われ、1）センターマネジメントチーム、2）活動資金管理班、3）情報運用班、4）活動企画班の四つに分けられ、今までの活動を振り返り仕事内容の簡略化を図りました。

- センターマネジメントチーム…各チームの総括。活動方針の決定。渉外活動。
- 活動資金管理班…義援金活動及びセンター活動資金調達。経費出納管理。
- 情報運用班…センター登録受付管理。ブログ・Twitter・記録管理。
- 活動企画班…企画の募集、推敲。プロジェクトチームの発足。

なお、新体制からブログの管理や更新、外部への協力要請を、Twitter を用いて発信するようになりました。下記がホームページ、ブログ、Twitter の URL やアカウントです。

福島大学災害ボランティアセンターホームページ
http://fukudai-volunteer-center.jimdo.com/

福島大学災害ボランティアセンターブログ
http://fukudaivc.blog67.fc2.com/

福島大学災害ボランティアセンターTwitter アカウント
@fukudai_saigai

3. 福島大学避難所ボランティア

【期間】　3/16(水)～4/30(土)

【利用者数】　47 世帯 169 名(延べ人数)

【ボランティア学生数】　130 名(延べ人数)

【避難所の概要】

東日本大震災により、浜通りを中心とする人々が県内の他地域や県外に避難を余儀なくされました。これに伴い、福島大学では、3 月 15 日の夜から避難者の受け入れを開始、翌 16 日に正式に避難所を開設しました。避難所の運営は福島大学教職員が中心となっていましたが、その他にも学生ボランティアがスタッフとして積極的に運営に携わりました。

福島大学避難所は、他の避難所には見られない 3 つの特長がありました。

1 つ目が、教授のネットワークや専門性を最大に生かしたことです。これにより必要な支援物資が全国各地から集まるシステムを構築することに成功しました。また、各教授がそれぞれの専門性を生かした支援を行い(子ども支援…幼児教育、高齢者支援…社会福祉など)、個別のニーズにも対応できる体制を整えることができました。

2 つ目が、大学施設を有効活用できたことです。福島大学は大学構内に学生寮が立地し、さらに幸いなことに停電も起きなかったため、調理室、シャワー室、洗濯機などの生活設備が整っていました。また、2 つある体育館の 1 つを運動場として開放したり、生協を食事スペースにするなど、比較的自由に大学施設を使うことができました。

3 つ目が、学生が積極的にボランティアに参加し、利用者の方と密に接することができたことです。このことが福島大学避難所最大の特長であり、利用者の方や外部からの評判も非常に高いものでした。学生が自ら主体的に動き、利用者の方たちと積極的にコミュニケーションをとることで、一人ひとりのニーズにきめ細やかな対応をすることができました。

また、避難所スタッフは「利用者の日常を取り戻す」「避難しているという意識を与えない」という共通認識のもとで活動していました。そのため、生活リズムにおいては、食事を用意するのではなく一緒に準備する、物資搬入や図書館の復旧などの仕事をしてもらう、居住スペースにおいては、寝るところと食事をとるところを別にする、子どもの遊びスペースや勉強スペース、女性専用スペースを設ける、個人用ロッカーを作るなど様々な工夫を凝らしました。

このような体制の下、4 月 30 日の閉所まで避難所運営は続き、47 世帯 169 名の方々が避難生活を送りました。なお、利用者の方々の有志により、福島大学構内に金木犀 1 株、しだれ桜 3 本が植樹されました。

【協力者の方々】

<炊き出し>

日付	協力者	献立
3/23(水)、4/7(木)	ポシェットロマン Eve	煮物、味噌汁、いなりずし
3/29(火)	中華料理石林	麻婆豆腐
4/1(金)	インド料理マナズラソイ	カレーライス、ナン
4/5 (火)	マクドナルド	フライドポテト
4/6 (水)	そば屋吉成	かけそば
4/7 (木)	福島市在住の食研究科の有志	醤油ラーメン
4/8(金)、4/20(水)	人間発達文化学類教員の有志	ちらし寿司、すまし汁、煮物
4/12(火)～毎週火曜日	餃子の王将	餃子
4/13(水)	NPO 法人ふくかんねっと	チヂミ、キムチ
4/14(木)	福島大学生協食堂部	親子丼、ハンバーグ
4/17(日)	福島県総合調理師会有志	和風定食
4/18(月)	石川県の寿司屋	寿司
4/24(日)	共生システム理工学類星野先生と友人の有志	お餅

<娯楽など>

日付	協力者	内容
3/27(日)	清水国明	森と湖の楽園
4/2(土)	陸上自衛隊合奏団	演奏会
4/5(火)	福島大学美術科渡邊教授	造形教室
4/5(火)～	NPO 法人 84 プロジェクト	各種スペース作り
4/8(金)	志賀昭裕	アルパ演奏
4/9(土)	桜の聖母短大の学生	がんばっぺ体操
	猪股親子	津軽三味線
4/11(月)	みちのくボンガーズ	お笑いライブ
4/13(水)	本田知美	ミニコンサート
4/16(土)	福島大学付属中学校管弦楽部	演奏会
4/20(水)	福島大学管弦楽部	演奏会
	蓬莱音楽グループ「ラララ」	ミニコンサート
4/21(木)	福島大学アカペラサークル	ミニコンサート

<支援物資>

支援物資	協力者
毛布	鹿児島県災害ボランティアセンター
布団	土湯温泉
水・食料など	山口大学
野菜	ヨークベニマル他
本	福島大学教員他
ランドセル	茨城県つくば市在住の方
ガソリン	新潟県旧山古志村
テレビ、洗濯機	東芝

※支援物資については延べ100件以上の支援をいただいておりますが、ページ数の都合上、こちらでは主なもののみ掲載させていただきます

【主な出来事】

日付	内容
3/24(木)	避難所卒業式(利用者)
3/25(金)	避難所卒業式(福島大学学生)
3/25(金)～数回	土湯温泉ツアー「ニュー扇屋」
3/27(日)	文部科学省視察
3/31(木)	バレーボール大会
4/1(金)	ソフトボール大会
	映画鑑賞会
4/10(日)	内閣府視察
4/11(月)	みちのくボンガーズによるお笑いライブ
4/13(水)	金木犀の植樹
4/14(木)	南三陸町へ物資搬入
4/17(日)	お花見
4/22(金)	しだれ桜の植樹
	避難所解散式

【避難所の時期区分】

福島大学避難所は大きく分けて前期、中期、後期の 3 つの時期に区分することができます。それぞれの時期で、避難所のレイアウトや求められるニーズにも違いが見られます。

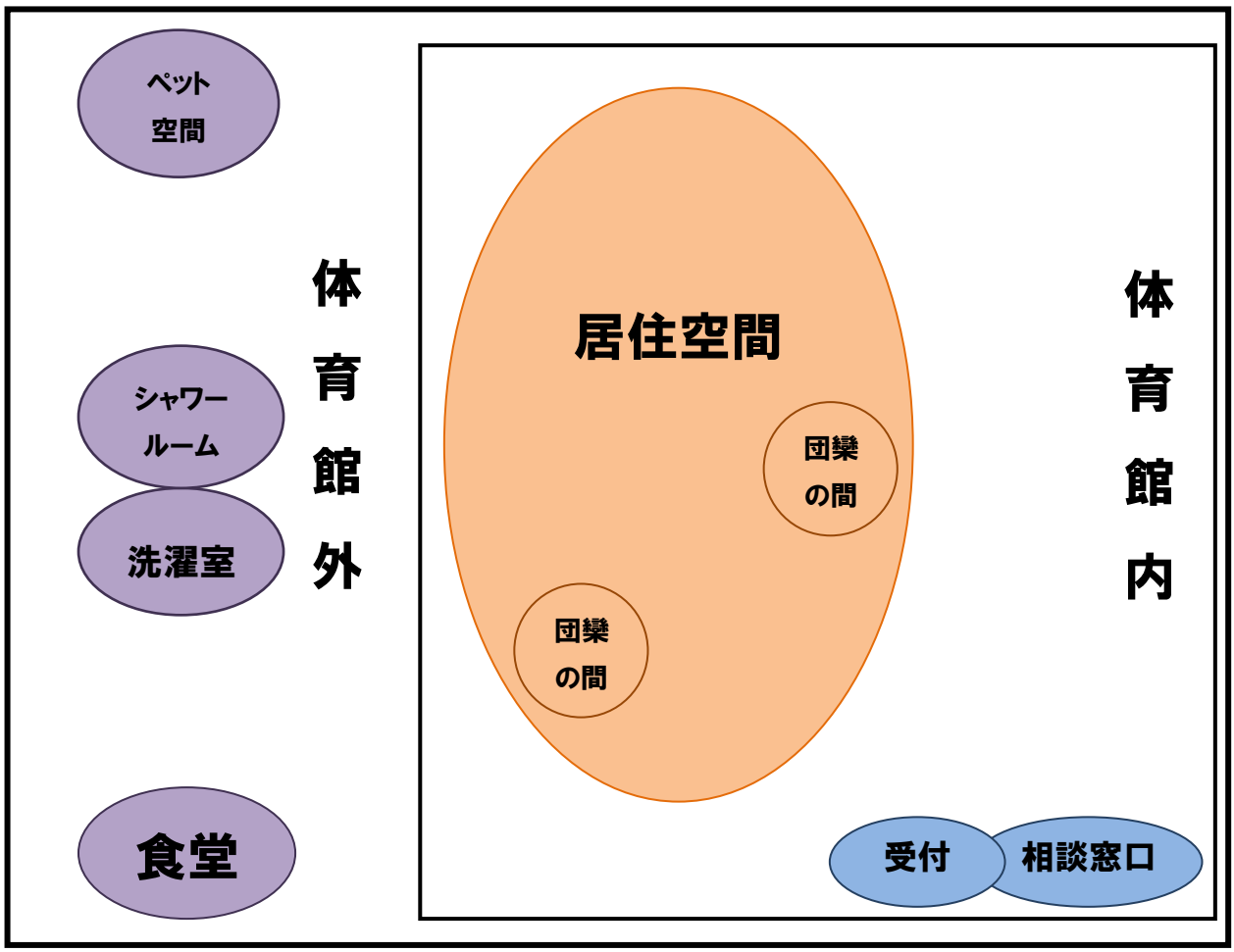
①前期(3/16～25)

前期は、緊急対応の性格が色濃く出ている時期です。この頃の活動内容は主に物資搬入、利用者のブース(居住空間)作りでした。個別の要望に対応するよりも、とにかく避難してきた方たちを受け入れるという作業に追われていました。

この時期には避難所の中での基本的な「ルール」作りがなされました。特に、「食事は各世帯のブースではなく、食堂に移動してとる」というルールを徹底しました。また、食事は基本的に学生と利用者の方とが一緒に調理し、みんなで食べるというスタイルをとるようにしていました。これら 2 つの工夫により、決まった時間に食堂へ移動し食事をとるという生活リズムが身に付いたうえ、家族内外のコミュニケーションの時間が十分に取られ、その後 1 ヵ月ほど続く避難生活での基礎的なコミュニティが形成されたように思えます。

他に気を付けた点は寒さ対策です。避難所開設直後の 3 月中旬はとても寒く、特に体育館は底冷えするうえ、ストーブの燃料となる石油も手に入りにくい状況でした。このような中、すきま風を防ぐ、段ボールで壁を作る、食事ではできるだけ温かいものを出すなどの対策をほどこしました。

避難所配置図（前期）



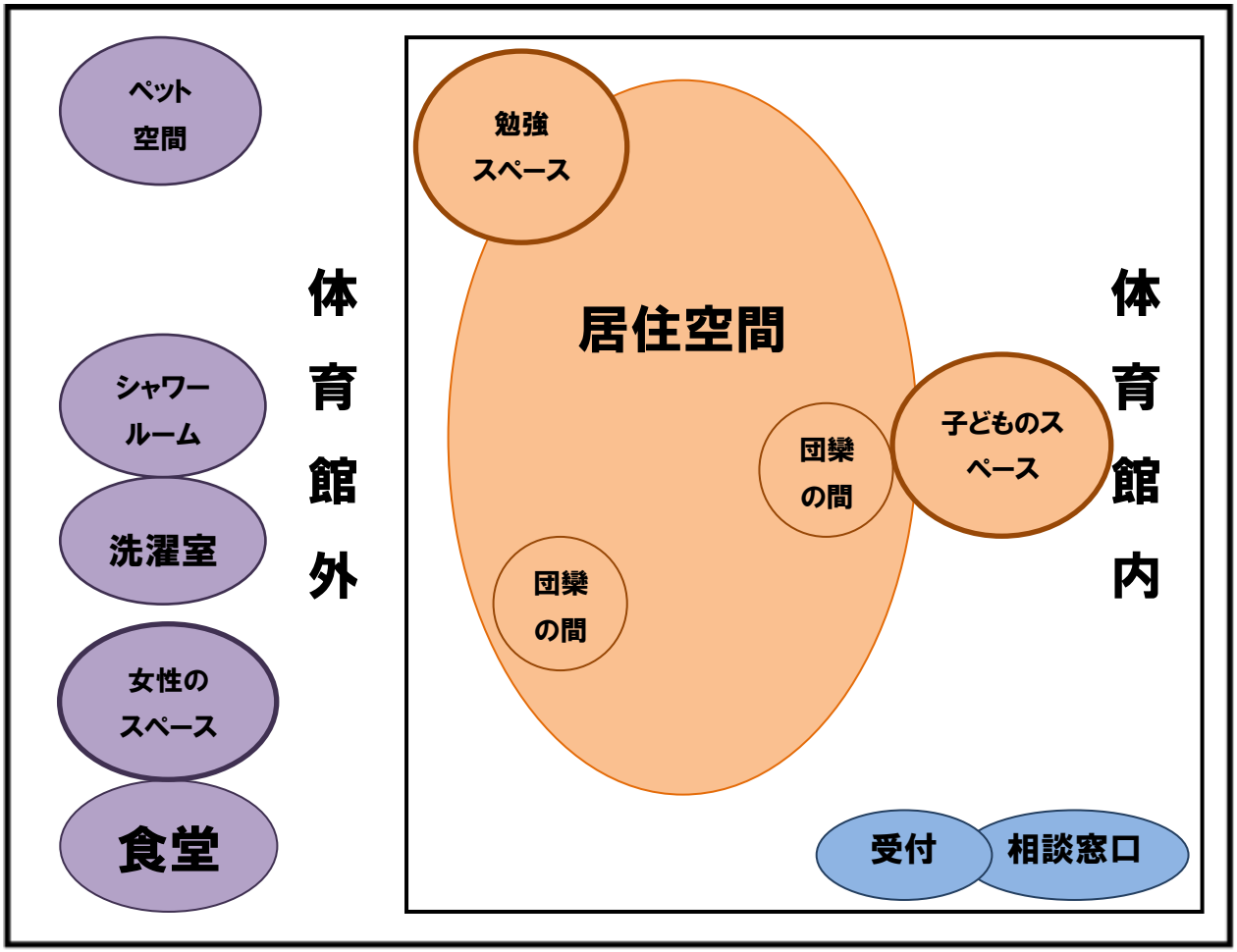
②中期(3/26～4/11)

中期は、支援の仕方を全体から個人へ徐々にしぼっていった時期です。具体的には、就学前の子どもたちのスペースの確保、中学生・受験生のための勉強スペースの確保、女性の着替えなどのスペースの確保などを行いました。

また、この頃から外部の方から炊き出しや催し物の申し出を受けることが多くなりました。このことにより、学生が食事を作る手間と時間が減り、その一方で利用者の方とコミュニケーションをとる時間が増えました。特に子どもたちと過ごす時間が増え、子どもを通して家族の方と中を深めることもできました。

東日本大震災から 1 か月の節目となる 4 月 11 日には、福島県のローカルお笑い芸人であるみちのくボンガーズを呼び、「これからも元気にがんばっていこう」という思いを込めて、お笑いライブを開催しました。この日には、すでに福大避難所を退所した方も来てくださりました。

避難所配置図(中期)



③後期(4/12～30)

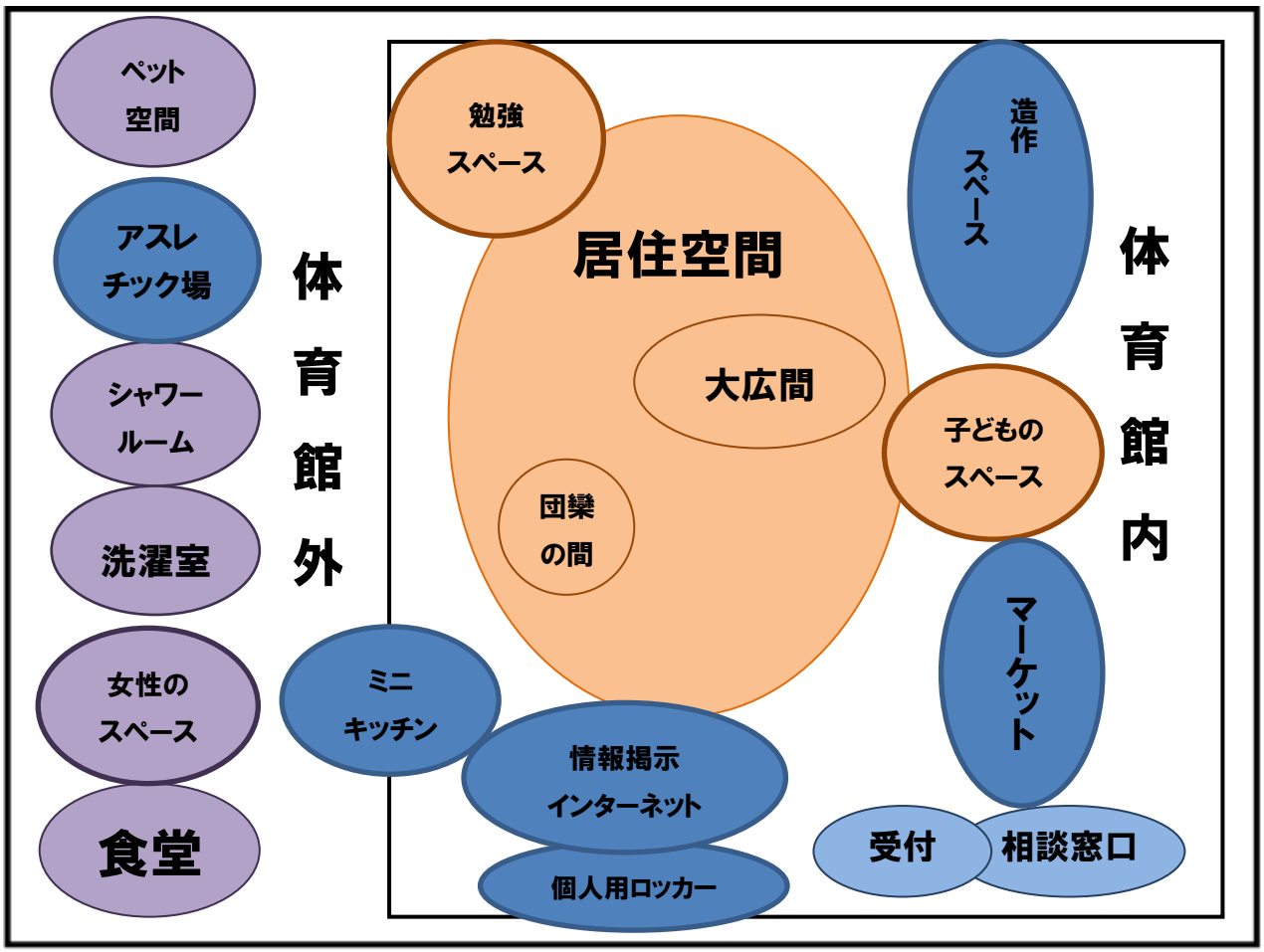
後期は、利用者個別のニーズに対応していった時期です。この頃には福大避難所を退所する方も増え始め、多くの方をお見送りした一方、残る方とはより緊密なコミュニケーションをとることもできるようになりました。その結果、利用者の方ともさらに打ち解け、個人的な悩みや要望も聞かれるようになりました。

そこで、自分に必要な物だけを必要な数だけ持って行けるマーケットスペースや、個人の荷物を保管できるロッカースペースを設置・拡充させました。

また、福大避難所に集まったものの、使い切れないと判断した支援物資を、他の避難所に送る作業も始まりました。4 月 12 日にはあづま体育館避難所、4 月 14 日には宮城県南三陸町にある避難所に物資を運びました。

後期にはイベント的な活動も盛んに行われ、4 月 17 日には利用者と避難所スタッフが総出でお花見を実施、4 月 22 日には「福大避難所解散式」を開催しました。解散式以降は避難所の規模は縮小されましたが、最後の家族が退所する日まで避難所運営は続き、4 月 30 日に福大避難所は正式に閉所となりました。

避難所配置図(後期)



【ボランティア学生の声】

1. 避難所ボランティアに参加したきっかけ、経緯
2. 利用者とのやり取り、印象に残っていること
3. 避難所ボランティアに参加して感じたこと

○川村 遼 （行政政策学類４年）

1. 地震発生後、帰省する手段がなくアパートで生活を送っていたところ、ゼミの教員から安否確認の連絡があり、その際に大学が避難所になっていることを知り、3 月 23 日から避難所でのボランティアに参加した。

2. 利用者の方々とは、子どもから高齢の方まで幅広く非常に親しい関係を築くことができたと思う。印象に残っている出来事は、利用者の方々と行ったバレーボールやソフトボールといったレクリエーション、大学構内での花見会などである。

3. 福大避難所では、利用者とボランティアが非常に良好な関係を築くことができていたと思う。他の避難所もいくつか見る機会があったが、福大のようなケースはかなり珍しい方だと思う。また、避難所でのボランティアを通して、様々な経験を得ることができた。今後も復興の一助となるよう、ボランティア活動を続けていこうと思う。

○大久保 沙織 （現代教養コース４年）

1. 私は 4 月 2 日から避難所ボランティアに携わるようになった。きっかけは、先輩やゼミの先生に誘われたことである。私自身、寮生で大学内にいたため、ほぼ毎日行っていた。

2. 私が印象に残っている出来事は、一番は子どもたちとのやり取りである。子どもたちはとても元気であったが、本来なら「家に帰りたい」と思っているはずなのに、あまりそういうことは言わなかった。しかし、地元の小学校での話を聞くと、楽しそうに話していたので、ほんとは帰りたいんだなという気持ちが伝わってきた。そのことがとても切なくて、印象深かった。

3. 私がボランティアに参加して感じたことは、「日本人らしい人のあたたかさ」である。普通に考えたら、避難してきている方のほうが何倍も辛いのに、皆さんとても謙虚で、私たちに気を遣ってくれて、日本人独特の忍耐強さと人のあたたかさを感じた。また、その反面、「平等」を実現することの難しさも感じた。避難所にいるすべての方に気持ち良く過ごしてもらいたいという気持ちはあっても、それを実際に実現することの難しさを痛感した。

○久保木 成美 （行政政策学類２年）

1. 3 月 11 日の震災を受け、避難所が開設された初日から避難所の運営の仕事に携わりました。突然の震災から日が経つにつれて周囲の友人たちは実家に避難していき、津波や原発の被害にあった地域に地元がある一部の学生が大学の周辺のアパートなどに残っているという状況でした。私の周囲からも友人が帰省し、先の見えない日々を１人で過ごすことに不安を感じてボランティアの活動のメンバーに応募したのがきっかけです。私自身もテレビやラジオでは知ることの出来ない自身の住む地域の情報をボランティアの仕事を通して手に入れることが出来ました。

2. 福島大学の避難所は他の避難所に比べて規模が大きくなかったことから、利用者の方々とコミュニケーションを取りながら避難所の運営をしていくことが出来ました。避難している方との密なコミュニケーションによって、利用者の方々のニーズを素早く反映させることに配慮していました。避難生活を送る子供たちの支援も避難所を開設した初期の段階から始めることが出来ました。学生が見守りの活動をしながら遊んで子供たちとの絆が深まりました。避難所の限られた空間の中ではありましたが、多様なイベントを企画、実施してきました。特に印象に残っているのは利用者の方と一緒に楽しんだお花見です。ボランティアを中心にアイディアを出し合って楽しい時間を共有しました。

3. 私は、今回の震災で初めて長期のボランティアに携わり多くの経験をしました。ボランティアの一人として感じたことは、ボランティアは利用者の方々と比較的近い存在になることができ、活動の仕方によって大きな可能性を有しているということです。今回のボランティアを通じて、人の絆の強さを感じました。全国の避難所でそれぞれに出来上がった教訓がこれからのボランティア一般に反映されていくことでボランティア活動を充実させることが出来るのではないかと感じます。

○神 貴大 （人間発達文化学類２年）

1. 震災後、地元福島が大変な被害に遭い、その状況を私はまだ信じられない状況でした。ですが、福島のために私にできることはないかと探していた時に、3 月 17 日に福島大学の方から避難所運営のボランティアをしませんか、という連絡がきました。その連絡を受け、大学に向かい、避難所 1 日目からボランティアをしていました。

2. 避難者とのかかわりは、本当に家族のような関係を築けていたと思う。避難所が開設され、避難してきた方の支援を行うということをいざするとなった時、私は正直どのように接していけばいいか分からなかった。避難してきた人が少しでも気が休むようにしていきたいと最初は思っていて、苦しく感じることが正直あった。しかし、典夫先生の「避難所を家のようにしたい」という言葉を聞いてすごく気持ちが楽になった。それから朝のおはようから夜のおやすみまで、避難者とあまり好ましい発言ではありませんが、まるで家族のように楽しい日々を過ごすことができました。その印象的な出来事としては、避難所の退所式の日です。退所式では、学生から避難者へ向けて歌をうたいました。その時には、多くの人が涙を流し、別れを惜しみました。こういった関係を築くことができたのは、避難者との距離がとても近い位置で関わることができたからであると思います。

3. 私は震災のボランティア活動に関してどうやって取り組んでいいか、正直分からず不安だらけでした。ですが、こういった活動を通して、自分の中では素晴らしい避難所であったと思っています。それは、福島大学という場所であったからこそできたことかもしれません。しかし、この経験は絶対に次に生かすことができるはずです。震災は起こっていいものではありませんが、また大きい震災が起こるであろうと言われています。もし、起きてしまった時、この経験を生かすことができれば、と思っています。このボランティアは、自分自身を成長させた大きなターニングポイントでもあります。また、笑顔がもつ力というのも感じました。「笑顔のループ」を胸にこれからも支援活動をしていきたいと思います。

【写真】

〇避難所の様子

居住スペース①

居住スペース②

食堂

団らんスペース

子どもスペース

学習スペース

支援物資①

支援物資②

マーケットスペース①

マーケットスペース②

インターネットスペース

本棚

大広間

造作スペース

ミニキッチン

アスレチック

個人用ロッカー

〇炊き出し

学生による炊き出し①

学生による炊き出し②

3.29 中華料理石林による炊き出し

4.1 インド料理マナズラソイによる炊き出し

4.6 そば屋吉成による炊き出し

4.18 寿司屋による炊き出し

〇出来事

3.24　卒業式(利用者)

3.25　卒業式(福島大学学生)

3.27 清水国明による保養プロジェクト

3.27 文部科学省の視察

4.1　ソフトボール大会

4.1　映画鑑賞会

4.5　造形教室

4.9　津軽三味線

4.11　みちのくボンガーズの訪問①

4.11　みちのくボンガーズの訪問②

4.13　金木犀の植樹

4.13　本田知美さんのコンサート

4.14　南三陸町への物資搬入

4.17　お花見①

4.17　お花見②

4.22　しだれ桜の植樹

4.22　避難所解散式①

4.22 避難所解散式②

4.　避難所後の活動

4-1. 福大ボラセンのこれまでの活動

日時	場所	活動内容	人数
5/1(日)	福島大学	設立	
5/3(火)	相馬市	子ども支援、物資搬入	12 名
5/11(水)・12(木)	福島大学	フリーマーケット	
5/14(土)	相馬市・新地町	子ども支援、泥出し	13 名
	ビックパレットふくしま	足湯	6 名
5/21(土)	新地町	がれき撤去、骨董品探し	9 名
	ビックパレットふくしま	足湯	7 名
5/22(日)	新地町・南相馬市	ボラセン訪問	12 名
	ビックパレットふくしま	足湯	1 名
5/24(火)	新地町	泥出し	10 名
5/28(土)	あづま総合運動公園体育館	誕生会プレゼント作り	10 名
	いわき市	ボラセン訪問	3 名
	ビックパレットふくしま	足湯	2 名
5/29(日)	ビックパレットふくしま	足湯	5 名
5/31(火)	みなと保育園	子ども支援	18 名
6/1(水)	福島大学	義捐金贈呈	1 名
6/4(土)	ビックパレットふくしま	足湯	5 名
6/5(日)	あづま総合運動公園体育館	誕生日会	15 名
	ビックパレットふくしま	足湯	5 名
6/7(火)	相馬保育所	子ども支援	21 名
6/11(土)	福島大学	シンポジウム	
6/12(日)	桜堤公園	ひまわりの種植え	13 名
	ビックパレットふくしま	足湯	4 名
6/17(金)	二本松・郭内公園仮設	生活物資搬入	11 名
6/18(土)	二本松・郭内公園仮設	入居者説明会	5 名
	ビックパレットふくしま	足湯	4 名
6/19(日)	福島県庁	復興構想会議	2 名
6/21(火)	福島大学	ネットワーク会議	15 名
6/26(日)	ビックパレットふくしま	足湯	1 名

日時	場所	活動内容	人数
7/1(金)	あづま総合運動公園体育館	ユニクロ衣類配布	8 名
	二本松・旧平石小跡地仮設	生活物資搬入	15 名
7/2(土)	福島大学	あぶくま会 MT	3 名
	あづま総合運動公園体育館	足湯	6 名
7/3(日)	福島県庁	NW 記者会見	3 名
	コラッセ	医大報告会	3 名
7/6(水)	福島大学	キャンパスライフ	3 名
7/7(木)	AOZ	サマキャン・説明会	8 名
7/8(金)	二本松・杉内仮設	生活物資搬入	12 名
	二本松市内	サマキャン・チラシ配り	8 名
7/8(金)～11(月)	京都・三重	サマキャン・現地視察	6 名
7/9(土)	あづま総合運動公園体育館	足湯	2 名
7/10(日)	清水学習センター	ひまわりの種植え	12 名
	ビックパレットふくしま	足湯	10 名
		シンポジウム	1 名
7/12(火)	ぴーなっつ	ネットワーク会議	4 名
7/13(水)	いわき市	サマキャン・チラシ配り	3 名
7/14(木)	AOZ	サマキャン・説明会	8 名
7/15(金)	二本松・安達運動場仮設	生活物資搬入	11 名
7/17(日)	いわき市・ラトブ	セミナー	3 名
	京都府	シンポジウム	4 名
7/21(木)	あづま総合運動公園体育館	炊き出しばあさん隊	9 名
	福島大学	三浦先生との MT	4 名
7/23(土)	あづま総合運動公園体育館	誕生日会・プレゼント作り	5 名
7/24(日)	清水学習センター	ひわまり・草むしり	16 名
	笹谷東仮設	足湯	6 名
	辰巳屋ラウンジ	京都との MT	4 名
	あづま総合運動公園体育館	誕生日会プレゼント作り	10 名
7/25(月)	ウィズもとまち	FMD 委員会	5 名
7/26(火)	福島市保健センター	医師会・浪江町との MT	3 名
7/28(木)	福島大学	内藤さんとの MT	2 名
7/30(土)	あづま総合運動公園体育館	足湯	2 名

日時	場所	活動内容	人数
7/31(日)	あづま総合運動公園体育館	誕生日会	10 名
8/2(火)～5(金)	沖縄	リフレッシュサマーキャンプ	
8/2(火)	福島学院大	ネットワーク会議	4 名
8/4(木)	福島大学	FM 福島・ラジオ出演	1 名
8/5(金)～9(火)	千葉県浦安市	明治大浦安ボランティア	3 名
8/9(火)～13(土)	三重県伊勢志摩など	三重サマーキャンプ	20 名
8/12(金)	AOZ	がんばっぺ体操を覚える会	3 名
8/14(日)	福島市	京都・吉村さんとの打ち合わせ	1 名
8/15(月)～30 日(火)	只見町	只見町臨時職員	3 名
8/16(火)	北幹線第 1 仮設	浪江町縁日	10 名
8/17(水)	笹谷東仮設	足湯	6 名
8/18(木)	新地町・相馬市	釣師区長ヒアリング	4 名
		BFF 小島さんとの MT	
8/20(土)	あづま総合運動公園体育館	炊き出しばあさん隊	6 名
		夏祭り	
	笹谷東仮設	足湯	4 名
8/22(月)	福島市青少年会館	フォーラム	1 名
8/28(日)	清水学習センター	ひわまり・草むしり	5 名
8/29(月)	ウィズもとまち	FMD 委員会	9 名
8/30(火)	郡山健康科学専門学校	ネットワーク会議	4 名
9/2(金)	フレッシュネスバーガー	BFF との MT	4 名
9/5(月)	新地町	田んぼエイド	7 名
9/5(月)～20(火)	只見町	只見町臨時職員	3 名
9/7(水)	カジャ	福島ユナイテッド FC との食事会	7 名
9/9(金)～13(火)	千葉県浦安市	明治大浦安ボランティア	3 名
9/11(日)	相馬市・新田地区	ビニールハウスの泥出し	18 名
	福島市	がんばっぺ体操 足湯の打ち合わせ	1 名
9/12(月)～15(木)	三重県	台風 12 号被災地の支援	3 名
9/15(木)	南相馬市・中央図書館	花植え	7 名
	ウィズもとまち	FMD 委員会	10 名
9/17(土)	相馬市・新田地区	住宅の泥出し、庭整理	9 名

日時	場所	活動内容	人数
9/18(日)	相馬市・新田地区	住宅の泥出し、畑の泥出し	12 名
9/19(月)	松川工業団地仮設	飯館村村立 55 周年祭「までいな 1 日」	13 名
	南矢野目仮設	足湯	7 名
9/20(火)	福島学院大	ネットワーク会議	4 名
9/21(水)	南相馬市・中央図書館	読み聞かせ	8 名
		講演会	
9/22(木)	ソーラーポスト	線量計の贈呈	2 名
	なごみの郷	秋祭り準備	2 名
9/23(金)	ウィル福島	FMD 秋祭り・とっておきの音楽祭	14 名
		明治大浦安ボランティア・福島 ver.	
9/23(金)～24(土)	愛知県名古屋市	防災フェスタ	2 名
9/24(土)	AOZ	ゆい・結フェスタ	1 名
9/25(日)	相馬市・柏崎地区	家具運び出し	5 名
	笹谷東仮設	バーベキュー	5 名
9/28(水)	笹谷東仮設	足湯	7 名
	郡山市小原田	住宅の泥出し	3 名
9/29(木)	北幹線、南矢野目、笹谷東仮設	ゴミ置き場の視察・聞き取り	3 名
9/30(金)	郡山市小原田	住宅の泥出し	12 名
10/1(土)	新地町	田んぼエイド	9 名
	宮代・子ども基地	子ども支援	5 名
10/2(日)	福島大学	シンポジウム	6 名
	北幹線第一仮設	足湯	10 名
10/8(土)～11(月)	神奈川県横浜市、川崎市	飯館村親子リフレッシュ事業	2 名
10/9(日)	南矢野目仮設	足湯	9 名
10/10(月)	大阪府門真市	ラブリーフェスタ、浪江焼きそば振る舞い	1 名
10/11(火)	相馬市	BFF の物資搬入	1 名
10/12(水)	相馬市	BFF の物資搬入	2 名
10/15(土)	福島市	復興祭	5 名
10/16(日)	本宮市・石神第一仮設	足湯	9 名
10/17(月)	南相馬市	家の整理	5 名

日時	場所	活動内容	人数
10/18(火)	郡山女子大学	ネットワーク会議	5 名
10/22(土)	北幹線第一仮設	足湯	7 名
10/23(日)	南矢野目、北幹線、 松川第一仮設	芋煮会	9 名
11/3（木）	京都	シンポジウム	5 名
11/5(土)・6(日)	文部科学省	まなびピア 2011	5 名
11/5(土)	二本松市	浪江町　十日市祭	7 名
11/6(日)	二本松市	浪江町　十日市祭	21 名
11/6(日)	本宮市・石神第一仮設	足湯	5 名
11/13(日)	南矢野目、笹谷東仮設	足湯	12 名
	相馬市	泥出し	17 名
11/20(日)	宮代第一仮設	足湯	8 名
11/25(金)	桜の聖母短大	ネットワーク会議	5 名
11/27(日)	北幹線第一仮設	足湯	10 名
12/2(金)	福島大学	外務省・中国記者の取材	1 名
		FCT にて活動放映	1 名
12/3(土)～4(日)	東京	足湯交流会	2 名
12/3(土)	笹谷東仮設	仮設 de カフェ	4 名
12/4(日)	本宮市・石神第一仮設	足湯	7 名
12/5(月)	BFF 相馬基地	生活支援物資の配布	2 名
	ウィズもとまち	FMD 委員会	5 名
12/6(火)	BFF 相馬基地	生活支援物資の配布	2 名
		TUF にて活動放映	2 名
12/10(土)	笹谷東仮設	お茶の会	5 名
	新地町	田んぼエイド	6 名
12/11（日）	南矢野目、笹谷東仮設	足湯	9 名
12/14(水)	飯野町川口電機製作所 飯野工場倉庫	物資配布	3 名
	チェンバおおまち	福島復興塾	3 名
12/17(土)	飯野町川口電機製作所 飯野工場倉庫	物資配布	7 名
12/18(日)	宮代第一仮設	足湯	8 名

日時	場所	活動内容	人数
12/19(月)	飯野町川口電機製作所 飯野工場倉庫	物資配布	3名
12/20(火)	飯野町川口電機製作所 飯野工場倉庫	物資配布	6名
	ウェディングエルティ	FMD委員会発表会	4名
12/22(木)	飯野町川口電機製作所飯野工場倉庫	物資配布	3名
12/23(金)	福島大学	ネットワーク会議	4名
12/27(火)	松川第一仮設	大望年会	14名
	宮代第一仮設		8名
	旧明治小学校仮設		5名
	新地町	田んぼエイド	3名
12/28(水)	飯野地域福祉センター	大望年会	15名
	旧松川小学校仮設		12名
2012/1/6(火)～9(金)	京都	おいでやす京都	2名
1/7(土)	あづま総合運動公園	東北人魂サッカーフェスティバル	7名
1/14(土)	本宮市・石神第一仮設	足湯	6名
	新地町	田んぼエイド	4名
1/14(土)～15(日)	京都	スキルアップ講座	2名
1/22(日)	南矢野目仮設	足湯	11名
	旧明治小学校仮設		6名
1/26(木)	日本大学	ネットワーク会議	6名
1/28(土)	旧松川小学校仮設	足湯	4名
1/29(日)	宮代第一仮設	足湯	8名

4-2. 福島子どもリフレッシュサマーキャンプ

【概要とコンセプト】

福島県は、東日本大震災を経て大きな爪痕を残される結果となりました。沿岸部では津波の被害が顕著であり、福島県全域での問題では原発事故による放射能問題があります。放射能問題に関してはいまだにどの情報が正しいのか、現状がどれだけの影響を及ぼすのか不鮮明であり、解決の糸口はまだ見つかりません。特にこの放射能問題で注目されるのが子どもへの影響です。現在(2012 年 1 月末)でも福島県の子供は、外で遊べない、マスクの着用を余儀なくされるという自分が少年期では考えつかない事象を受け止めなければなりません。季節の風物詩を楽しむことができないというのはとても悲しいことだと思います。

学生も、夏が近づくにつれ、海水浴、BBQ、花火といったイベントに楽しみを寄せますが、「小学生はこの福島県で夏を楽しむイベントを経験することができるのか」と懸念され、この福島子どもリフレッシュサマーキャンプ（以下サマーキャンプ)が企画されました。

サマーキャンプのコンセプトは「放射能を気にせず思いっきり海水浴などを楽しむ」というものでした。放射能問題が懸念される中、①原発事故の被災地域である福島で、低線量地域への避難の機会を設ける、②参加者の心理的ストレスの解消、保護者の抱えるストレスの軽減を図る、③短期保養ではあるが、来年度以降の夏や冬にも継続的に開催できるようにする、の 3 点を狙いとし企画の概要としました。また、福大避難所後期に teamM という三重の学生団体と知り合い、今後何か共同企画ができないものかと話し合っていました。この関係もあり、福島とは離れた三重に子どもを誘致する企画に仕上げようと、サマーキャンプの概要が決定しました。

【参加スタッフ】

・福島大学学生　20 名
・三重県・愛知県の学生　25 名
・福島大学行政政策学類教授鈴木典夫
・看護師
・日本イラク医療支援ネットワーク(JIM-NET)スタッフ　5 名
・JIM-NET より医療チーム
・JTB 東北福島支店黒田萌花添乗員

【募集】

福島県全域より、小学生(4～6 年生)40 名を募集しました。しかし、約 3 週間の募集期間で定員の 9 倍以上となる 370 名の応募があり、抽選の結果、選ばれた 40 名が参加しました。

【サマーキャンプスタッフの声】

○松藤 真博 （福島大学人間発達文化学類 4 年）

私は、「ふくしま子どもリフレッシュサマーキャンプ」においてキャンプリーダーを務めさせていただきました。サマーキャンプの中で子どもたちは、生き生きとした表情や行動など子どもらしさを取り戻して、貴重な体験活動ができていたと感じました。

この企画の準備段階としてまず、福島大学・三重県内の大学生に対して、キャンプメンバーの募集・決定をしていくことから始まりました。そして子どもたちに、放射能を気にせず思いっきり外で遊んでもらうことを指針として企画内容を検討していきました。企画検討の段階において、企画の準備のための仕事別・企画日程別に学生をいくつかのに分けて活動していくことができるようにしました。仕事や企画日程別に学生が担当することにより、一人ひとりの学生が主体的に企画に参加していくことができたり、自分の役割を見出し認識することで楽しみながら活動していったりしてもらいたかったからです。また、学生が企画自体への理解が不十分なままサマーキャンプに参加し、次の活動に対して不安や疑問をもったままでは、その不安は子どもたちにも伝わってしまい、子どもたちが思いっきり活動することができないと考えたからです。

さらに、ミーティングの進行や、学生たちと旅行会社 JTB、JIM-NET の情報共有・意見交換の場の設定、公募などもおこないました。情報共有や意見交換を通して、学生間同士だけでなく、企業や団体の方たちとも、ふくしま子どもリフレッシュサマーキャンプをおこなっていく仲間として、互いの考えの違いやその良さに気付き、深め高め合いながら、企画・検討をしていきたかったからです。サマーキャンプの本番では、すべてのサマーキャンプのスタッフ一人ひとりの子どもたちへの強い思いや願いが、活動の節々に見られました。そしてこのスタッフの思いや願いにより子どもたちはただ遊んで楽しむだけでなく、友だちの良さや三重県の良さに気付いたり、福島の良さを再認識したりすることができていました。私は、5 日間の日程の内、3 日目の行程を就職試験のため途中で抜け、4 日目からまたキャンプに戻りました。サマーキャンプに戻ってきた時、私は、子どもたちの充実した顔、そして何よりあきらかにキャンプ前半の時より成長している姿を見ることができました。また、学生も子どもたちや様々な人たちと交流し活動することを通して成長していることを感じることができました。

私は、ふくしま子どもリフレッシュサマーキャンプを通して人と人とのつながりを持つこと、そのつながりを発揮していくことの楽しさを実感することができました。今後、この実感し学んだことを生かし、伝えていきたいと思います。

最後となりましたが、福島大学の仲間をはじめ、三重県内の大学生、JIM-net、各企業の方々などの協力のもと企画を立ち上げ、実行していくことができました。ありがとうございました。

「他人と過去は変えられない。自分と未来は変えられる！！」

○尾形 美夏子 （福島大学人間発達文化学類 4 年）

私は、今回の福島子どもリフレッシュサマーキャンプで裏方を担当しました。裏方は、各班について行動している学生をサポートしたり、キャンプの日程がスムーズに進むように準備をしたりする仕事です。具体的な仕事の内容としては、出発日の朝の受付、バス内での人数確認、フェリー内での食事会場の席取り、企画の準備や片づけ、企画中の子どもたちの安全確認、子どもたちの健康管理、海水浴後の水着の洗濯、忘れ物チェック、写真撮影、しおり・賞状・文集の作成などとなっています。また、私は資金管理も担当していたので、必要物品の準備にかかるお金を管理したり、三重大学さんや JIM-NET さんから援助していただいた資金を、旅費として JTB さんへ支払いを行ったりしました。

裏方担当の学生は常にキャンプ中の日程を把握し、予定されている日程の常に先を行動し、子どもたちを誘導していきます。子どもたちとの直接のかかわりは、班担当の学生と比べるととても少なくなってしまいますが、子どもたちが楽しめるキャンプになるように全力でサポートしました。

今回のサマーキャンプは、福島大学災害ボランティアセンターとして初めての大規模な企画であったことや、三重という離れた場所の学生と連携して準備を行っていかなければならなかったこともあり、戸惑ってしまった部分も多くありました。スタッフ全員が子どもたちに対する強い思いを持って準備を進めていましたが、その思いをサマーキャンプという形で行動に移していくことは、簡単なことではありませんでした。裏方としてサマーキャンプに参加して私が感じた反省点は、企画や運営に対するスタッフ全員の共通理解やスケジュールの読み込みをもっと強化すべきだという点です。今回、福島大学側のスタッフは約 20 名、三重大学側のスタッフは約 25 名であり、子ども 1 人に対して大学生 1 人がつけるくらいに恵まれていたと言えます。しかし、スタッフが多い分、今回のキャンプに対する思いや、内容についての認識も様々だったと思います。また、スタッフ全員でのミーティングが困難な状況であったので、福島大学側と三重大学側の連携がうまく図れていなかったと感じる部分もありました。これらは、今後に生かしていかなければならない改善点であると思います。

しかし、サマーキャンプ中の楽しそうな子どもたちの様子を見ていると、このキャンプは大成功だったと言えると思います。知らない場所で家族から離れ、盛りだくさんな企画をこなして疲れていてもおかしくないというのに、子どもたちは毎日楽しそうに思いっきり遊んでいました。このキャンプを通して「子どもたちに思いっきり外で遊んでほしい」という私たちの思いを十分に実現することができたと思います。

私自身、福島出身であるため、福島の子どもたちのことにこんなにもたくさんの人々が関心を持ち、実際に協力的に行動してくれていることをありがたく感じました。サマーキャンプを運営するにあたり、協力していただいたみなさんに感謝しています。

○小西 智枝美 （福島大学現代教養コース２年）

私が 3.11 の震災以降、震災関係のボランティアに参加したのは、この活動が初めてであった。友人からこの企画について聞かされ、単純に「楽しそう」と感じて、参加することを決めた。

実際に参加してみて、現在の福島の子ども達を取り巻く環境について知ることができたと思う。放射能から子どもの体を守るため、子ども達が屋外で活動することを制限されているということは、テレビや新聞の報道で知っていたが、実際に子どもと接してみることで、子どもたちが放射能に対してどのような考えを持っているかということや、家庭でどのような対策が取られているかなどを、じかに知ることができた。

今回のキャンプの中で、三重のスタッフに「最初に福島の子どもを見た時、（肌の）色が白いなあと思った」と言われたことがあった。三重に着く前、フェリーの中で子ども達と接している中では気付かなかったのだが、その言葉を聞いた時は何となくショックだった。「今現在の福島では、子ども達が屋外で長時間活動できない」という現実を突きつけられた気がした。キャンプの 3 日目、子ども達は海水浴で思い切り遊び、真っ黒に日焼けをしていた。日焼けで肌がひりひりして痛がっていても、「また海に入って遊びたい」という子どもがたくさんいた。翌日は結局砂浜でレクリエーションをした後に、少しだけ海に入るということになったのだが、子ども達は屋外での活動を十分楽しんでいたようだった。

私は裏方担当のスタッフで、子どもたちと直接触れ合って活動した時間は比較的少なかったのだが、子どもたちがめいっぱい遊び楽しんでいる様子は十分に伝わってきた。最初は緊張していた子どもたちも徐々に打ち解け合っていき、名前をすぐ覚えてくれた。

子どもたちをなるべく疲れさせないようにということと、子どもたちにもっと楽しんでもらいたいということだけを一心に考えていた。そのために裏方担当のスタッフとして三重・愛知の学生スタッフと打ち合わせをする機会が比較的多かったが、その三重・愛知のスタッフも同じ気持ちでいてくれ、より子どもたちが楽しめるようにと精一杯協力してくれた。福島から遠く離れたところに住む学生が福島の子どもたちのことを想ってくれているのだと思うととても嬉しかったし、子どもたちもやはりその気持ちを感じていたように思う。さらにサマーキャンプ中は毎晩スタッフミーティングを行なっていたのだが、日が経つにつれて内容の濃いものになっていった。それほどスタッフひとりひとりが福島の子どもたちと真剣に向き合ってくれていたのだろう。

福島に帰り、少し疲れたような表情を見せながらも、子どもたちは迎えに来た保護者に楽しそうに土産話をしていた。そしてそれを本当に嬉しそうに聞いている保護者の表情がとても印象的だった。

○岡 歩美 （三重大学教育学部３年）

teamM の一員である私は、三重スタッフとして今回「ふくしま子どもリフレッシュサマーキャンプ」に参加しました。私は震災後、福島に行った際、被災地の瓦礫の状況と同様に、マスクをしている子どもたちの多さに衝撃を受けました。たった 4 歳くらいの女の子が、「ママに怒られるからさわっちゃだめなんだよ」と外に生えている草に触ろうとしている友だちに声をかけている状況に、悲しみを覚えました。たくさんの自然と触れ合ってほしい時期である子ども時代だからこそ、少しでも福島の子どもたちに三重県で自然に触れてのびのびと遊んで欲しい、また、きっと言葉にはできないストレスを感じている子どもたちに、リフレッシュして欲しいという想いを持ち、この活動に参加しました。

キャンプ当日までは、福島のスタッフと連絡を取り合いながら、各コンテンツごとに担当を分けて準備をしていきました。当日は 6 人の子どもたちを 1 グループとする生活班のリーダーとして、子どもたちと生活や活動を共にしました。ここでは、何よりも子どもたちの安全面や健康に注意をし、活動を行いました。点呼や人数確認をこまめにすること、福島組と子どもたちの健康状態の共有をしっかり行うことで、無事にキャンプを終えることができました。特に海水浴では細心の注意を払って子どもたちを監督し、責任を持って子どもたちを見守ることができたのではないかと思います。

キャンプでは、バーベキュー、花火、海水浴、伊勢型紙、スペイン村、レクリエーションなど様々なコンテンツがありました。中でも花火や海水浴などの夏ならではのイベントは子どもたちも大盛り上がりでした。海は津波を連想させるのではないか、という私の不安をよそに、「今年は海に入れないと思っていたから嬉しい！」「毎日楽しいから、終わるのがいやだなー」などと嬉しい声と共にたくさんの輝いた笑顔を見ることができました。本当にみんないきいきとして思いっきり楽しむことができていました。

また、たった 3 日間しか子どもたちと過ごす時間はありませんでしたが、その中でも、班の子どもたち同士の仲が深まっていく様子を見ることができました。「船に乗っている時は、班のみんな（子どもたち）と学年が違うから大丈夫かなと思っていたけど、いっぱい友達ができたよ！」と笑顔で私に報告してくれる子もいました。今回のサマーキャンプは、福島の学生や地域の皆さんのご協力のおかげで無事に終えることができました。福島の学生と共に活動することで、その後も連絡を取り合ったりお互いの情報を交換し合う関係が続いています。カウンターパートとして、このつながりを大事にし、今回の活動で学んだことと反省を活かして、これからも活動を行っていきたいと思います。

【活動の様子】

フェリー出港時

名古屋港水族館

上　ユースホステル前 BBQ
右上志摩スペイン村
右　海水浴場集合写真
右下帰路、集合写真
下　志摩スペイン村

【参加者からの声】

サマーキャンプはプログラムの中に文集作成を織り込んでいました。思い出ベスト３や、感想、アルバムページを設け参加者に発送しました。その中でも感想の欄が子どもの素直な想いが書かれていました。ここでは一部を抜粋して掲載したいと思います。

・最初は不安だったけど、すぐ友達ができてよかったです。このサマーキャンプでこんなにすばらしい友達ができるとは思いませんでした。
・またみんなと一緒に三重に行ってみたいです。
・福島市では遊ぶことができないけど、三重で思いっきり遊ぶことができました。
・中学生になって行けるチャンスがあったら、また行きたいです。
・来年は小学生５~中学１年生を参加枠にしてほしい。そうすればみんなとまた行ける…
・福島では経験できないことができて幸せだった。
・福島では海水浴はできなかったろうから、抽選に当たって本当に良かったです。
・30 キロ圏内に家があって外でも海でも遊べなかったです。でも、外で遊ぶことができて本当に良かったです。

完成した文集(右)
102 ページに渡り、
子どもたちの旅の
思い出やアルバム
が掲載されている。

編集作業を進める中、大学生もサマーキャンプ当時を思い出し、懐かしむと同時にまた県全域に離れてしまった子ども達を心配してしまいます。来年もやってほしいや、参加できてよかったという声を聞けて達成感を強く感じました。

放射能問題はこれからも継続するでしょう。保護者はストレスを抱え続け、子どもたちは窮屈な思いをし続けるのがこれからの福島の姿なのでしょうか。その中でも、少しでもその手助けになれるよう、私たち学生はこのリフレッシュ事業を定期的継続的に企画したいと考えています。

【チラシ】

福島・三重県内学生共同支援事業
ふくしま子ども
リフレッシュサマーキャンプ

今年の夏は、三重の海で思いっきり遊びましょう！
子どもたちの夏休みの楽しい思い出づくりを、私たち大学生が全力でサポートします！！

【出発日】２０１１年8月9日（火）～8月１３日（土）
※往路フェリー欠航の場合中止となります
【食事条件】４泊５日（朝食４回、昼食４回、夕食４回）
【募集人数】４０名(最少催行人数２０名)
【対象】福島県内の小学校４年生から６年生
【応募期間】７月３日（日）～7月１８日（月）消印有効
応募者多数の場合、厳正な抽選の上、当選者を決定します。抽選結果のお知らせにつきましては、最終案内の郵送を持ちましてかえさせていただきます。
【添乗員】全行程同行します。また、団長は福島大学行政政策学類教授 鈴木典夫が務めます。
【旅行代金】無料 （別途 任意で保険料５００円）
※今回は（学生団体）福島大学災害ボランティアセンター、三重学生災害支援団体 team M、日本イラク医療支援ネットワーク JIM-NET、愛チカラの援助で行われています。
【応募方法】下記の内容を明記の上、JTB 東北 福島支店に郵送、またはＦＡＸにてお送りください。
JTB 東北福島支店 （〒960-8035 福島市本町 5-26） FAX：０２４（５２２）２９８０
【記載内容】参加者のお名前、学年、年齢、性別、住所、書類送付先住所(現在の生活場所)、電話番号、バス乗車希望地(福島または郡山)、ご兄弟参加の場合のお名前、学年、年齢、性別
【行程】

■8月9日（火）
郡山駅または福島駅（8:30～10:00）・・・仙台港（11:30～12:50）～～～名古屋港（翌 10:00）
■8月１０日（水）
名古屋港（10:00～11:00）・・・・名古屋港水族館・・・・BBQ・・・・伊勢志摩ユースホステル（泊）
■8月１１日（木）
ホテル（8:30）・・・海水浴（阿児の松原海水浴場）※雨天中止・・・伊勢型紙でのランプシェードづくり・・・・・志摩スペイン村・・・・・伊勢志摩ユースホステル（泊）
■8月１２日（金）
ホテル（8:30）・・・・・スイカ割り、ドッヂボールなど（次郎六郎海水浴場）・・・・・・名古屋港（17:00～19:00）～～～～～仙台港（翌 16:40）
■8月１３日（土）
仙台港（翌 16:40）・・・・・・・福島駅または郡山駅（19:00～20:30）

旅行に含まれるもの：宿泊代、各種交通費（集合・解散場所までは含まれませんので各自でお願いいたします）、食事代、各種観光入場料、体験料、旅行業務取扱手数料代

内容に関するお問い合わせは
(学生団体)福島大学災害ボランティアセンターまで
TEL:０８０－６６８３－８４５７
Mail:fukudai_volunteer@hotmail.co.jp

旅行企画・実施
お申し込みは
JTB 東北 福島支店
福島市本町5-26 〒960-8035
TEL: ０２４（５２３）３３１４（月～金、9:30～17:30）
FAX: ０２４（５２２）２９８０
総合旅行業務取扱管理者：髙見 直政 担当者：黒田 萌花

【協力団体】

・JTB 東北福島支店

・三重学生災害支援団体 teamM

・愛チカラ

・日本イラク医療支援ネットワーク(JIM-NET)

4-3. 浜通り地方での活動

【概要】

2011 年 4 月 30 日に福大避難所が閉所となると、津波被害を受けた地域への支援活動に本格的に着手するようになりました。特に相双地区においては、大学・専門学校などの高等教育機関が立地しておらず、学生ボランティアの数が極端に少ないという状況下にあったため、福大ボラセンが相双地区をカバーするという体制を整えました。

2012 年 1 月末時点で、延べ 167 名の学生が浜通り地方での活動に参加しています。

浜通りでの学生の活動にあたり、問題となったのが交通手段・交通費についてです。福島市近郊の活動と大きく違って、浜通りでの活動では長距離移動が必要になります。しかし、学生の中で自由に使うことのできる車を持っている学生はそれほど多くありません。また、1 回の活動につき、約 3000 円のガソリン代がかかります。これらの負担が重なると、浜通りでの参加する学生が減ってしまうのではないかという懸念がありました。

しかし、夏ごろになると「一般社団法人 Brige for Fukushima」の協力のもと、交通手段の確保、交通費の補助を得ることができ、浜通り地方での活動を停滞させることなく行うことができました。

冬の時期に入り、現在では浜通り地方での活動は一時見合わせていますが、春からは活動を再開していく予定です。

【活動の詳細】

①子ども支援(保育園支援)

<活動の経緯>

2011 年 5 月 3 日、福大ボラセンのメンバーが相双地区への支援物資の搬入、津波被害の視察、復旧活動のために相馬市・新地町に入りました。その道中、相馬市松川浦にある「みなと保育園」に立ち寄り、震災直後の保育園の様子や現状を保育士の方から伺いました。その結果、被災した子どもたちの心のケア、放射線の影響により外で遊べないことに対するフラストレーションなど、様々な問題が浮き彫りになりました。このような問題に取り組むため、相馬での子ども支援が始まりました。

<活動実績>

日時	場所	内容
5/14(土)	相馬市・みなと保育園	餅つき、物資の配布
5/31(火)	相馬市・みなと保育園	子どもたちの遊び支援
6/7(火)	相馬市・相馬保育所	子どもたちの遊び支援

5 月 14 日の活動では、福大避難所で使い切れなかった物資を持参し、無料でお配りしました。配布したのは子ども服、ウェットティシュ、おむつ、おしりふき、粉ミルクなどです。また、同じ日にみなと保育園に子ども支援に来ていた NPO 法人と一緒に餅つきも行いました。

5 月 31 日と 6 月 7 日には、みなと保育園、相馬保育所において子どもの遊び支援を行いました。内容は、年中クラスではビニールプールに細かくちぎった新聞紙やシュレッダーくずを入れた「新聞紙プール」を、年少クラスでは白い無地の T シャツを着て園児たちに絵やペイントをしてもらう「T シャツペイント」、大きな段ボールにペンや絵の具でペイントしてもらう「大お絵かき大会」、を行いました。遊び終わった後は、園児たちと一緒に後片付けや掃除をしました。

<学生の声>

1. 子どもたちの様子はどのようなものであったか
2. 活動を通して感じたこと

○中木 知子 （行政政策学類 4 年）

1. 子どもたちは、私たちが訪問をしたことでとても喜んでくれた。新聞紙のプールでは、新聞紙をびりびりにやぶいたり、紙をプールの水のようにお互いにかけ合ったり、たいへんはしゃいでいるようにみえた。学生たちに甘える様子や一緒に楽しく笑い合う姿が見られた。
   保育園の先生によると、長い間、外で遊べなかったことからストレスがたまりがちになり、落ち着きがなくなったりけんかっ早くなったりした子どもも多いということで、久しぶりに大声を出したりたくさん笑ったりできてよかったと言われた。

2. 震災の経験からなんとなく元気がなくなったり明るい気持ちになれなくなった子どもたちにとって、遊びの場がとても大切なものであることを感じた。自由に体を動かし、笑い合いながら遊ぶことのできる時間はなくてはならないものである。
   今回のような機会を通して、外で走り回るというような今までと同じような遊びはできないけれど、室内でも思いっきり楽しめるような遊びを提供することができてよかったと思う。遊ぶことでリフレッシュしたり、笑顔を見せてくれたり、私たちの訪問を喜んでくれたことが嬉しかった。そして、保育園に訪問して子どもたちと一緒に遊ぶことができて、子どもたちと楽しい時間と笑顔を共有することができ、私たちも元気をもらったと感じている。

○田崎 友梨 （行政政策学類４年）

1. 私はプールを担当したため、そこでの園児たちの様子しか見ることができなかった。はじめは恐る恐る遠慮がちに新聞紙を破っていたが、学生たちが手本を見せたり実際にプールに入ったりするのを見て、徐々に園児たちも思いっきり新聞紙を破いたり、笑いながらはしゃぐようになった。プールの中でかくれんぼをしたり学生たちとじゃれあったりする園児もいれば、戸惑って保育園の先生にべったりだった園児もいた。1時間程度の活動なのに、学生たちの方が疲れてしまうほど子どもたちは元気いっぱいだった。後片付けの時間になっても遊びたそうにしている子もいたが、みんな一生懸命に散らかった新聞紙を集めて教室を片付けていた。学生たちが帰る時には、園児たちみんなが玄関や縁側に集まって「ばいばい！」「また来てね！」と大声で見送ってくれた。

2. この活動の目的は、放射能汚染のために屋外で遊べない代わりに、子どもたちがストレスを発散できるような屋内遊びを提供することだった。園の先生たちの話では、今まで外で遊べたのが制限され、ストレスがたまって家庭で荒れたり暴力的になったりする子どももいるとのことだった。屋内では狭く、自由に走り回ったり砂や遊具で遊んだりできないため、子どもたちにとってはとてももどかしく辛いだろうと思った。また、保護者や先生たちにとっても、安全のためとはいえ園でも家庭でも子どもたちの遊びを制限しなくてはならないことは、辛くもありストレスになっているのではないかと思う。だが活動に参加したほとんどの園児たちは、大声で笑ったり大学生に懐いたりしていたので、少しでもストレスが発散されたのではないかと思う。普段は家族や園の先生たちとの関わりがほとんどだと思うので、時々外部の人がやってきて一緒に遊ぶということは、園児たちにとって新鮮で良い意味で刺激になると思う。まだまだ屋外での制限があるため、子どもたちが屋内でも体を使って遊べるようなレクリエーションを提供すること、そしてそれを継続的に行うことで子どもたちが元気になってくれたらと思う。福島大学ボランティアセンターとしては、次年度も定期的に幼稚園や保育園、ひいては小学校などへも出向いて、子どもたちと一緒に遊ぶ活動を設けていくことが必要だと思う。

<写真>

5.14　みなと保育園

5.14　みなと保育園

5.31　みなと保育園

5.31　みなと保育園

6.7　相馬保育所

6.7　相馬保育所

②Bridge for Fukushima との協働

<活動の経緯>

福大避難所が閉所となった後の、2011 年 5 月から 6 月にかけて、福大ボラセンでは福島県新地町での泥出し作業を 4 回行いました。これらの活動は新地町ボランティアセンターの協力のもと行われました。

しかし、6 月以降は交通手段の確保や交通費の負担などの問題により、浜通り地方での活動が一時停滞することとなりました。

このような状況の中、7月 11 日にビックパレットふくしまにて行われたシンポジウムで、福大ボラセン 4 年の伊藤が「一般社団法人 Bridge for Fukushima」(以下 BfF)の伴場賢一代表と知り合いました。これ以降、福大ボラセンと BfF は浜通り地方において協力して活動することになりました。

BfF は東日本大震災後に結成された、相馬市・南相馬市を中心に活動している団体で、その活動内容は“社会人版の福大ボラセン”といったものです。BfF は、相双地区で独自にニーズ調査をし、道具を揃え、参加者を企業から募り支援活動を行っていました。しかし、時間が経つにつれ企業からのボランティア参加者は減っていき、被災した方からのニーズに応えきれない状況になっていました。

そのような状況の中で、福大ボラセンと出会いました。こうして、人員は足りているが交通手段・交通費に困っていた福大ボラセンと、人員は足りていないが交通手段・交通費はある BfF が協力して、相双地区支援にあたる体制が出来上がりました。

BfF との協働活動は泥出しだけでなく、図書館での子ども支援や相馬基地での生活支援物資の配布など多岐に渡りました。なお、2011 年 10 月には、BfF より福大ボラセンに、移動手段として車 1 台が貸与されました。

<活動実績>

日時	場所	内容
5/3(火)	相馬市	物資搬入
5/14(土)	相馬市・新地町	側溝の泥出し
5/21(土)	新地町	がれき撤去・骨董品探し
5/24(火)	新地町	側溝の泥出し
9/11(日)	相馬市新田地区	ビニールハウスの泥出し
9/15(木)	南相馬市中央図書館	花植え
9/17(土)	相馬市新田地区	住宅の泥出し、庭整理
9/18(日)	相馬市新田地区	住宅の泥出し・畑の泥出し
9/21(水)	南相馬市中央図書館	読み聞かせ、講演会の補助
9/25(日)	相馬市柏崎地区	家具運び出し
10/11(火)	相馬市 BfF 基地	生活支援物資の配布

日時	場所	内容
10/12(水)	相馬市 BfF 基地	生活支援物資の配布
10/17(月)	南相馬市	家の整理
11/13(日)	相馬市	泥出し
12/5(月)	相馬市 BfF 基地	生活支援物資の配布
12/6(火)	相馬市 BfF 基地	生活支援物資の配布

泥出し作業ではいくつかの注意点があります。
①砂埃が舞うのでマスクを着用する
②泥の付着や傷口からばい菌が入る恐れがあるため長袖を着用する
③こまめに休憩を取る(30～40 分に 1 回)
④熱中症や脱水症状の予防のためこまめに水分補給をする

作業では開始前にリーダーを決め、リーダーを中心に注意点に気をつけながら作業にあたりました。

5 月までの活動は福大ボラセン独自のもので、9 月以降は BfF との協働活動となっています。特に、9 月 17、18 日の活動では、京都から福島にボランティアにやってきた「すざく 1 番隊」の学生たちとも協力し活動しました。

<学生の声>

1. 住民や協力者からどのような声が聞かれたか
2. 活動を通して感じたこと

○佐々木 優太 (共生システム理工学類 3 年)

1. 住民の方からは、「数年は農作物を作ることはできないけれど、土砂をなんとかしなければ数十年作ることができないから本当に助かりました。私たちの力では時間がかかるのですが、こんなに大勢で作業してくれてありがとうございました。」などの声をいただいた。

2. 活動の終わりに、「ありがとうございました」と涙ながら全員と握手し、お礼をしていただいた。だが、そこまでたいしたことはしていないと思いながら活動していたので、このような言葉を聞くなど思っていなかった。しかし、そこに住む方は町が津波に飲まれ、生きるか死ぬかの経験をした。そして、いまも今後の生活は保障されていない。住民の方にとって今日の活動はとても大切なことだと実感した。こちらこそ、ありがとうございますという気持ちになった。
   また、すざく 1 番隊とは農家民宿で 1 晩過ごした。他県からみた福島や、それぞれの思

いを聞き、被災地に対する思いは変わらないと感じた。被災地でさらに放射能で騒がれている福島に来るというだけで覚悟や思いが伝わった。
今回の活動に参加し、人とのつながりを考えさせられることとなり、お互いに助け合う活動を続けていかなければならないと感じた。

<写真>

5.14　新地町泥出し

5.21　新地町骨董品探し

5.24　新地町泥出し

9.11　相馬市泥出し

9.11　相馬市泥出し

9.11　相馬市泥出し

9.17　相馬市泥出し

9.17　相馬市泥出し

9.18　相馬市泥出し

9.18　相馬市泥出し

9.21　南相馬市読み聞かせ・講演会

9.25　相馬市家具の運び出し

③田んぼエイドプロジェクト

<活動の経緯>

新地町農家支援「田んぼエイドプロジェクト」は、めざましテレビと日本財団の協同プロジェクトで、津波による塩害で耕作不能となってしまった水田を復活させるというものです。その方法は、土壌の塩分を吸収して成長する「綿花」を栽培し、土壌の塩分濃度を低くするというものです。このプロジェクトは農家、日本財団、フジテレビ三者間で進められていましたが、その企画に、福島県内の大学生も参加して欲しいとの要望があがりました。2011 年 9 月に新地町で説明会が開かれ、プロジェクトの概要、また、地元の大学生（若者）に参加してもらうことで元気や笑顔を広めたい、という話が主催者からありました。同じ日に、綿が植えられている土地の見学、本プロジェクトを引き受けた農家の目黒さんのお宅訪問が行われました。こうして田んぼエイドプロジェクトへの参加が始まりました。

<活動実績>

日時	場所	内容
9/5(月)	新地町	説明会、見学
10/1(土)	新地町	田んぼの除草
12/10(土)	新地町	綿花の収穫
12/27(火)	新地町	綿花から綿の摘み取り
2012 年 1/14(土)	新地町	田んぼの整備

活動内容は、綿花栽培中の農家目黒さんのお手伝いでした。具体的には、草むしりや収穫など、人手が必要になるポイントでの、作業参加です。地元の方はじめ、フジテレビの担当者、日本財団の方、他大学の学生など、福島大学の学生以外にも多くの人が参加していました。このプロジェクトは複数年にわたって行われるもので、今後は目黒さん以外にも、塩害を受けた他の農家が参加するのではと見込まれます。

<学生の声>

1. 住民や協力者からどのような声が聞かれたか
2. 活動を通して感じたこと

○鹿野 なるみ （経済経営学類 2 年）

1. 参加者は作業しながらそれぞれにいろいろなことをやり取りしていました。普段農作業をしない人にとっては作業内容自体がとても新鮮だったと思います。作業のなかではそういった声も聞かれました。また、3 月 11 日の津波についても、お話を聞くことができました。目黒さんや日本財団の方からは、「こうやって学生が参加してくれることがうれしい」というような声も聞かれました。

2. 毎回新地町での活動だったのですが、いつも目黒さんが参加者に対して良くしてくれたことが、とても印象に残っています。作業を手伝うことよりも、皆が集まってわいわいにぎやかな雰囲気ができていることを、目黒さんは一番に喜んでいる、そういったことが一参加者として感じられました。ボランティアの中で最も大切なことは、被災者の方とのつながりを持つことや、自分たちの元気や笑顔を届けることであるということを実感できる活動でした。福島県内の農家では、浜通り地方の塩害以外にも放射能という問題もあります。農家はとても厳しい局面にあると思います。そんな中で自分から立ち上がろう、この状況を打破していこうという強さも感じることができました。

〇手塚 博之 （行政政策学類３年）

1. 田んぼの持ち主である目黒文夫さんとそのご家族から、震災以前の新地町の様子や、震災によって変わってしまった事、農家の方ならではの放射能問題への不安などについてお話して頂いた。
   2 月 8 日に東京で行われた同企画の打ち上げでは、たった一年で耕作不能であった土地を復活させたノウハウを、周囲の農家仲間にも伝えていきたいとお話されていた。また、来年度も別の耕作不能地で同企画を行う事から、福島大学生のボランティアとしての参加を目黒さん、日本財団、フジテレビから依頼されている（決定ではない）。

2. この企画内での私達ボランティアの役割は、雑草駆除や綿花収穫だけでなく、福島の「今」を日本中に伝えることも含まれていたように思われる。企画を立ち上げたのがテレビ局であったことから、第一回目からフジテレビの情報番組「めざましテレビ」の撮影が行われていた。撮影やインタビューなどが行われた事によって通常のボランティア活動時より作業効率は良くなかったが、福島の「今」を日本中に伝える事ができた点、塩害を受けた土地を復活させるノウハウを確立する事ができた点、そして何より、耕作不能であった目黒さんの田んぼを復活させる事ができた点などから、この企画にボランティアとして参加させて頂いた事には、大きな意義が有ったと言える。

4-4. 大望年会 in 仮設住宅

【活動名】大望年会 in 仮設住宅

【活動理念】

東日本大震災があった 2011 年も残すところ、あと 1 ヶ月となった 2011 年 12 月。仮設住宅での生活も半年を迎え、住民の中でも徐々にコミュニティが生まれ、自治会のつながりや、近隣住民との交流の機会も増えつつあります。福大ボラセンでも各仮設住宅にお邪魔して、自治会や住民のみなさんと一緒になって芋煮会や季節に伴った各種イベントを行なってきました。今回も、人々が集まり、毎年行われ、今年の年忘れの最後の大イベントということで、大望年会を企画しました。今回も今までのコミュニティ支援同様、住民自治の助長、コミュニティ支援というスタンスで、あくまで、住民のみなさんと一緒になって、楽しく声を掛け合って、たくさんお話する直接的仮設住宅支援を目標としました。特に”コミュニティの形成”、”人間関係の構築”、”心のリフレッシュ”をコンセプトに活動しました。

【活動に至った経緯】

望年会企画の背景に、大きく 2 つの団体とのコネクションがありました。

始めの出会いは 2011 年 7 月 11 日のビックパレットふくしまでのシンポジウムです。福大ボラセンから伊藤が参加しました。そこで、出会ったのが、「一般社団法人　Think the Earth」(当時は「Think the Earth プロジェクト」)でした。シンポジウムで私たちの活動を知り、50 万円の寄付をしてくださいました。

その後、2011 年 10 月に Think　the　Earth 主催の会に再度パネリストとして伊藤が出席したところ、福島出身の人が集まり、復興のために活躍する「Link with ふくしま」という団体に出会いました。Link with ふくしまの菅家元志代表（慶應義塾大学大学院生）とともに、今後の仮設住宅での支援イベントについて話していたところ、クリスマス会の案が上がりました。

再度 2011 年 11 月に Think the Earth の方々と今後のボラセンとの連携支援のお話をする機会がありました。参加してくださった当団体の原田麻里子さん、風間美穂さんとともにお話をしたところ、「クリスマス会は他の団体もやるようなので、私たちは、年の終わりに日本中どこでも普通に行われる忘年会をしよう」ということになり、実施に至りました。特に、仮設住宅における忘年会の意図は、上記で述べたとおりですが、“忘”年会ではなく、“望”年会としたのは、2011 年を忘れるのではなく、2012 年の幸せを望むという前向きの意味での“ぼうねんかい”であります。

【日時】

2011 年 12 月 27 日（火）、28 日（水）

【場所】

12 月 27 日：宮代第一及び第二応急仮設住宅（以下宮代仮設住宅）
松川第一工業団地跡応急仮設住宅（以下松川第一仮設住宅）
旧明治小学校跡応急仮設住宅（以下旧明治小跡仮設住宅）
12 月 28 日：旧飯野小学校跡仮設住宅（以下旧飯野小跡仮設住宅）
旧松川小学校跡仮設住宅（以下旧松川小跡仮設住宅）

計 5 か所

【参加人数】

宮代仮設住宅　　：学生及び支援団体 8 名、住民 34 名、計 42 名
松川第一仮設住宅　：学生及び支援団体 14 名、住民 80 名、計 94 名
旧明治小跡仮設住宅：学生 5 名、住民 15 名、計 20 名
旧飯野小跡仮設住宅：学生及び支援団体 15 名、住民 17 名、計 32 名
旧松川小跡仮設住宅：学生及び支援団体 13 名、住民 17 名、計 30 名

計 218 名

【活動内容】

・宮代仮設住宅　　：餅つき（あんこ、きなこ、納豆）、そば、ビンゴ大会
・松川第一仮設住宅　：そば、稲荷すし、懇親会
・旧明治小跡仮設住宅：そば、ビンゴ大会
・旧飯野小跡仮設住宅：そば、ビンゴ大会
・旧松川小跡仮設住宅：餅つき（あんこ、きなこ、納豆）、そば、ビンゴ大会

【立案から当日までの流れ、準備】

・企画書立案
・実施場所の確定
・プレイスリーダー決定
・実施場所への訪問、傾聴活動
・自治会長・管理人へのあいさつと、入念な話し合い
・浪江、飯舘社会福祉協議会へのあいさつ
・場所の下見
・仮設住宅へのプレスリリース
・仮設住宅内の参加者の募集

・Link with ふくしまへ“Ready for”へのリリース依頼
・必要物品の調整、準備、借用、購入、整理
・Think the Earth への物品依頼
・当日参加者の募集、確定（福大ボラセン、ふくしま復興支援学生ネットワーク、その他つながりのある団体）

～開催以後
・後援団体への開催報告書提出
・決算
・サンクスレターの回収（Ready for から資金援助くださった団体への引換え品）
・借用物品の返却

【各開催仮設住宅の報告】

〇宮代仮設住宅：プレイスリーダー・土谷 一貴 （行政政策学類 3 年）

宮代仮設住宅では、30 名を超える住民の参加がありました。9 時に仮設住宅に到着したのですが、すでにたくさんの人が集まっていらっしゃいました。参加した方々の半分くらいは 60 歳上の高齢者でした。宮代仮設住宅では、もちつき、年越しそば、ビンゴ大会を行いました。まずはじめに、あったかいもち米が冷める前にすぐに餅をつきました。若いお父さん達が先導して餅をついてくださいました。自分もつかせていただいたのですが、難しい！上手に出来ないのを見かねて、すぐに交代させられました。その後、つきたての餅にあんこ、きなこ、納豆を今度はお母さん方がトッピングし、やわらかい餅をみなさんでいただきました。やわらくておいしかったです。その後ビンゴ大会で会場を盛り上げ、メインのそばを食べました。具沢山で美味しいつゆで作るそばでしたが、麺をしっかり茹でることができず、「硬い」と皆さんからは辛口の評価でした。しかし、帰り際、「楽しかったわ。また来て気でくださいね。」と言われたのが本当にうれしかったです。特にもちつきを楽しみにしていたようでした。「仮設ではもちつきができるとは思わなかった。」おばあちゃんが話してくれました。今回の課題として、住民と学生の交流が少なかったかのように思います。こちらからガンガン話して、たくさん交流できる場にできればよかったと思います。

仮設住宅だからといって、日常生活や文化までも非日常である必要はない。どこにいても、年末、年越しはやってくる。そこに人がいるならなおさらです。人が集まって、話し、交流し合うことこそ、いまの仮設住宅に求められる、支援の形だと思いました。また、世代を超えた、自治会での交流の場、自治会の積極的活動を手助けすることも足がかりとして僕らが継続していかなければならないと思います。

○松川第一仮設住宅：プレイスリーダー・安達 隆裕　（人間発達文化学類 3 年）

以前から松川第一仮設住宅を訪問していたこともあり、みなさんと面識が合った分、円滑に企画を煮詰めていくことができました。私が今回の企画において心がけた点が、

「楽しむことは大前提であり、今年の年越しは仮設住宅ではあるけど、震災以前と変わらない楽しみを感じてもらいたい」

ということでした。までいな 1 日や芋煮会で訪れた時からそうでしたが、学生を拒むことなく一緒に楽しんでくださる方が多いのが松川第一仮設住宅の特徴だったと思います。仮設住宅は暗いイメージを持たれがちなステージではありますが、今まで私たちを暖かく迎えてくれたこの仮設住宅で、多くの後援を受け、みなさんにそばといなり寿司を振る舞うことができましたが。これは私たちからの恩返しのような形であったと思います。ただ準備段階での私たちの不手際により、鍋やガスの借用を請け負わせてしまったことが反省点です。

「今回は仕方ないから次はよろしくね」

と、今の私たちの関係を絶つ様子もなくバックアップをしてくださいました。これが非常に心残りです。終始楽しく、且つ企画を煮詰める際に留意しなければならないことを気づけるとても有意義な企画であったと思います。今の関係を崩すことなく、より仲良く来年度以降も松川第一仮設住宅の皆さんと関わっていけたらなと思います。

○旧明治小跡仮設住宅：プレイスリーダー・渡邊 知佳　（行政政策学類 2 年）

飯館村の人が生活をしている旧明治小学校跡地の仮設住宅で大望年会を開催しました。仮設住宅自体が小規模なものであり、子どもの数も他の仮設住宅に比べて少ないことから、当日になるまで本当に楽しんでもらえるのか不安がありました。しかしいざ当日になってみると、予定時間よりも早くに人が集まり始め、高齢者中心の総勢 20 名ほどでわいわいしながらソバやおいなりさんを作りました。おいなりさんは調理が簡単だということもあり、小さい子どもも積極的に調理に参加してくれました。他の仮設住宅では、広い場所を借りて望年会を開催したのですが、この旧明治小跡仮設住宅では場所がなく集会所で開催しました。しかし、狭いからこそ人々の距離が近くなり、アットホームな雰囲気で終始笑顔が絶えない望年会になりました。また全員が名札を付けて行ったことから、全員が名前で呼び合い、私たちボランティアの学生の名前も覚えてくださり、「また来てね。待ってるよ」との言葉に嬉しさを感じました。ビンゴ大会では、景品が少し子ども向けのものが多かったというような細かな反省点はありますが、全体的にはとてもよい雰囲気で終わることができました。一度、望年会を挨拶で閉めたあともほとんどの人が残り、お話をしたりおばあちゃんが持ってきてくれたお手玉で遊んだりして、交流を楽しみました。望年会の名の通り、大変な 1 年だった 2011 年を締めくくり、新たな 1 年に望みを託す笑顔が溢れた会になりました。旧明治小跡仮設住宅は今まで福島大学災害ボランティアセンターが関わったことのない仮設住宅だ

ったので、この望年会は新たな繋がりを持つとてもいいきっかけになりました。これからもこの繋がりを大事にして継続して関わっていきたいです。

〇旧飯野小跡仮設住宅：プレイスリーダー・大矢 直輝　（人間発達文化学類２年）

私が担当した旧飯野小跡仮設住宅は、飯舘村の方々が入居していました。こちらの集会所は非常に狭いため、すぐ隣にある地域福祉センターの和室を貸していただき、そこで行いました。福大ボラセンとしては初めて入る仮設住宅だったので、どれくらいの人が来てくれるかという不安もありましたが、当日は小さい子どもたちから年配の方まで幅広い年齢層の方々に来ていただきとても賑わいました。子どもたちは和室や外で遊び、お母さん方は料理の手伝いをしてくださり、とても良い雰囲気でした。こちらの仮設でもビンゴ大会をしたのですが、賞品が子ども向けであったり、ビンゴを良く分からない方がいたりしてお年寄りの方が喜んでもらえるようなイベントにはならなかったという反省点もありました。しかし、午後からは足湯も行い、こちらはお年寄りの方々にも好評でした。今回の活動では、今まで関与していなかった仮設住宅で活動を行うきっかけができたことが大変重要だったと思います。大学からも比較的近い距離にあるので、これからも足湯活動などを通して継続的に関わっていきたいと思います。そして、ほんのひと時でしたが住民の皆さんで過ごせたことが良かったと思います。話を聞くと住民同士で集まるようなイベントはなかったようなので、いろいろあった１年の最後を皆さんで楽しく過ごせてよかったと思います。

〇旧松川小跡仮設住宅：プレイスリーダー・神 貴大　（人間発達文化学類２年）

私が担当した旧松川小跡仮設住宅は、福大ボラセンとしては初めて関わりをもったのがこの望年会でした。正直、どんな雰囲気の仮設住宅なのか、どのくらいの方が参加していただけるのか、全く見えていなかったので不安がありました。しかし、仮設住宅に行って、自治会長さんや管理人の方とお話をしてみて、「今までここでイベントがなかったから、ぜひ」というお言葉をいただき、安心しました。当日、子どもからおじいちゃん、おばあちゃんまで 20 名近くの方々が参加してくださり、ボランティアとの交流を図りながら盛大に行うことができました。一緒に餅つきをして汁餅などにして食べたり、そばを食べたり、商品をかけてビンゴ大会をしたり、お酒を入れながらお話をしている時の表情はみんな「笑顔」でした。おばあちゃんたちには知恵も教えてもらいながら一緒に調理しました。この仮設では、「本当に今までイベントがなかったため、あまり楽しみがなかった。また来てね。いつでも待っているから」という人がいました。こう言ってもらえることで、自分たちの活動が本当にやってよかったと思えます。こういった声がコミュニティ支援の形成のつながっていくのだと実感しました。しかし、この仮設住宅にはもっと多くの人がいるので、今回参加できなかった人たちも今後巻き込んでいきたいなと思います。

【協力団体】

・Think the Earth：物資支援していただける団体との交渉、当日の参加
・しぶそば（東急グルメフロント）：そば、お稲荷さんお揚げ
・佐藤雄飛：当日の参加
・大山千枚田保存会：うるち米 30kg、日本酒 4 升
・平良ひとみ：もち米 30kg
・らでぃっしゅぼーや：グレープフルーツジュース
・下田商事株式会社「下田英一」：うどん、そば
・水下青果(名古屋)：ビール 2 ケース
・新城酒店(福島)：日本酒 5 升
・武田昌広(秋田)：もち米 10 ｷﾛ
・京都災害ボランティア支援センター：
　飲料(京都府の子どもからの応援メッセージ付きの物)、現金 5 万円
・Link with ふくしま：Ready for との交渉、当日の参加
・Ready for：資金調達の援助
・Ready for に賛同してくださった各種団体、個人の皆様：
　資金提供（合計 207,000 円、手取り 173,880 円）
・福島大学生活協同組合：
　なべ、おたまの借用。白米の蒸かし作業。もち米を蒸かしてくださったお菓子屋さんへの仲介。

【収支報告】

・収入の部
　¥173,880（Ready for より）
　¥50,000（京都災害ボランティア支援センターより）
　¥41,100（住民参加費）

小計　¥264,980

※Ready　for に関して

企画発足当初、物資、資金もゼロからのスタートを考えていたため、望年会開催に関わる全ての費用の設定をしたところ、20 万円あれば開催できるということを見込んでおりました。そのため、Link with ふくしまを通じて、Ready for より 20 万円を目標金額として募らせていただきました。しかし、幸いなことに企画が進むにつれ、口コミ等でこの企画を知った方から、たくさんの“モノ”の支援をいただき、本来購入するべきものを買わずに、いただいたものだけで、運営できるようになりました。そのため、実質集まった 20 万円（手

取り 173,880 円）を大幅に使わずに開催する結果になってしまいました。各企業、団体、個人様がご支援くださいました理由として、仮設住宅での望年会というところに共感され、ご出資くださったということでしたので、みなさんの意思をくめずに、このように予算を余す結果になってしまいました。大変申し訳ありませんでした。

仮設住宅での支援ということで、今後とも長い支援が必要と考えていますし、今後とも続けていく予定です。今回集まった資金を、違う形ではありますが、何らかの仮設住宅支援の方に役立てていきたいと思いますので、ご理解のほどよろしくお願い致します。

・支出の部

¥64,660（ビンゴ景品、菜箸、しゃもじ、ザル、ビン後カード、包丁、七味唐子、カッセットボンベ、バケツ、しょうゆ、粒あん、こしあん、納豆、きなこ、砂糖、なると、焼酎、もち米蒸かし料、なべ借用）

小計　¥64,660

・繰り越し

264,980－64,660=200,320

200,320 円は次回以降の福大ボラセンの仮設住宅での活動資金に繰り越します。

【総評】

2 日間の望年会を終えて、被災された仮設住宅の住人の方と一緒になって楽しい時間を過ごすことができました。とても有意義な 2 日間だったと思います。

当日は各仮設住宅での内容は多少異なりますが、主に餅つきをして、つきたての餅をあんこ・きなこ等につけたり、汁餅にして食べたり、また、年越しそば、うどんを食べたりしました。作る過程において、おじいさん、おばあさん方が自分たちの不慣れな手つきを見て『こうやんだ』や『違う、違う』と言って、知恵を自分たちに教えてくださりました。また、ビンゴ大会や親睦会で仮設住宅の住民と学生とでお酒を飲みながらいろいろな話をしました。

今回目的としていた、”コミュニティの形成””人間関係の構築””心のリフレッシュ”。少なくともご参加くださった方々が喜び、幸せそうな表情を見る限り、達成できたのではと思います。また、そういう場を提供できたこと大変嬉しく思います。

参加者の言葉から、「仮設ではもちつきをできるとは思わなかった。ほんとにうれしい。」、「本当に来てくれてありがとう。」、「こんなこと考える余裕がなかった。来年はいい年にしたいね。」と心温まるお言葉をいただきました。素直にうれしかったです。

今回の課題として、学生住民間の交流が少なかったことと、準備段階での準備不足が挙げられました。年末ということで、前日までわたわたしてしまったことが、当日の余裕のない

運営につながったと思います。準備は入念にしていくことを今後の活動に活かしていきたいと思います。

このように人が集まって、顔を合わせて、お話することで、生まれる関係性や、親密なコミュニティ作りにつながります。ただ、忘年会で、楽しむだけでなく、1つ2つ先を見越した支援の形を今後も継続してければと思います。

これが終わりではなく、仮設住宅との関係性の始まりだと考えています。まだまだ生活は大変ですが、少しでも生活に密着した長期にわたる生活支援を行っていこうと考えています。

最後に、今回ご支援くださった皆様。本当に感謝しています。たくさんの方々に支えられてこのように活動できたことスタッフ一同大変感激しております。

今回のご支援でも、日本中のつながり、温かさ、応援の厚さをひしひしと感じました。こうやって僕たちの活動に賛同して下さる方々へ、大変感謝しております。本当にありがとうございました。

【活動写真】

〇宮代仮設住宅

○旧松川小跡仮設住宅

○旧飯野小跡仮設住宅

【チラシ】

各仮設住宅に配布、掲載したチラシです

大忘年会開催のお知らせ

福島大学災害ボランティアセンター

今年も残すところあと１か月となりました。2011 年の締めくくりとして、大忘年会を開催します。新しい年を気持ちよく迎えるために、みんなで作って、飲んで、食べて、盛り上がりましょう！

当日は、年越しそばを作って食べます。親睦会もございますので、ぜひぜひみなさんで誘い合わせの上、ご参加ください！！

差し入れ、持ち込み大歓迎です！！！

◆日程：１２月　　日（　）　１０：００～１６：００

◆場所：福島市内７ヶ所の仮設

浪江：宮代（第一、第二）、信夫台

飯舘：松川第一、松川第二、松川小学校跡、飯野小学校跡、明治小学校跡

◆内容：そば、親睦会

・そば―こちらでそば玉とつゆ、具材、調理器具を用意しますので、"年越しそば"の意味を込めてみんなで作って食べましょう。

・親睦会―今年の最後の締めくくりとして、みんなで飲んで食べて、語らいましょう。

◆会費：５００円（当日回収）

※参加される方は下記の申込み用紙に記入の上、　　に提出お願いします。

連絡先

大忘年会　参加申し込み用紙

●参加者氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

●連絡先：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

※なお、申込用紙に記入いただいた個人情報は当企画以外には使用いたしません。

5. FUKUSHIMA 足湯隊

【概要】

「足湯」とは、お湯を張ったたらいに足を浸けてもらい、私たちは手を揉みほぐす活動でありながら、そこで生まれる会話を大切にしている傾聴ボランティアです。この活動は1995 年に発生した阪神・淡路大震災の際に始まって以来、日本各地で行われています。日本財団の ROAD プロジェクトにより、この度の東日本大震災においても東北各地に足湯隊が派遣されている活動です。

足湯隊は 4 月後半から福島県郡山市のビッグパレットふくしまにも派遣されていましたが、活動は単発でした。そこで、今後も長期的に足湯活動を継続し、避難生活に寄り添い続けるためにも、地元福島の学生が足湯隊を引き継いでいくことが望ましいとし、2011 年 5 月 3 日、ビッグパレットふくしま生活支援ボランティアセンターである「おだがいさまセンター」の方から福島大学生が足湯隊の引き継ぎの提案を受けました。そして 5 月 15 日、地元学生が足湯ボランティアに参加し、足湯は「話を引き出し、元気も引き出す」効果的なツールであり、学生も気軽に参加できるということから、福島大学生、郡山の学生を中心とし、県内各地の大学・専門学校生で「FUKUSHIMA 足湯隊」を結成することが決定しました。「FUKUSIMA 足湯隊」は形式のあるものではなく、福島県内での足湯活動に参加する人々ということで、ゆるく定義づけています。

当初の活動は、ビッグパレットふくしまを拠点に福島大学、国際メディカルテクノロジー専門学校、ポラリス保健看護学院、郡山女子大学の学生によって毎週末行われ、毎回約 15 名前後の学生が参加していました。そして、結成から 1 カ月半後の 7 月 2 日、福島市の学生が県北地区のあづま総合運動公園の避難所で活動を開始し、自分の担当の地区で足湯を行うという体制に移っていきました。その後、仮設住宅への居住が進むにつれて活動範囲を仮設住宅へと拡大していき、傾聴活動、またコミュニティ形成支援活動として動き続けています。

2011.5　ビッグパレットふくしま避難所

2011.10　南矢野目仮設住宅

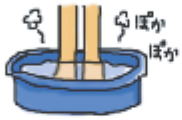
秘伝・足湯のやり方

◆笑顔であいさつする。

◆コップ一杯のお水を飲んでもらう。

◆くるぶしが浸かる程度のお湯をはる。
（お湯に生姜や粗塩などをいれると保温効果が高まる）

◆足を浸けてもらう。
（ぬるめに設定し、さし湯をして温度を調整する）



ゆっくりとお湯を足したり、
水を足したりして手で温度を確認

◆指を一本一本もむ。
（陰陽に則って昼は左手から、
夜は右手から）

◆水かきをつまむようにもむ。

◆手のひら全体をもみほぐす。
相手の親指と小指の間に自分の小指を入れ、手をそらせる。
そのままAを押し、つづいてBを押す。

A：労宮（心包経）
…心や心臓に関係
B：魚際（肺経）
…お腹の状態を表す

◆手の甲を上にして、
人差し指と親指のつけ根を押す。

◆手の人差し指と親指の側や、
小指側をさする。

◆前腕（手首からひじにかけて）の
内側と外側をさする。

◆上腕（ひじから肩にかけて）の
外側をさする。

◆片手が終わったら、さし湯をしてお湯の温度を調整する。

◆両手が終わったら、
足を軽く洗ってタオルでふく。

自分の曲で
受け止めると良いです

準備するもの
・水（飲用水）、コップ
・お湯、水（さし水用）
　あれば粗塩、生姜、入浴剤など
・ガス（ボンベ、コンロ）
・たらい、バケツ、ひしゃく
・タオル
・ブルーシート、椅子

【足湯の目的や効果について】

仮設住宅では集会所や談話室を利用して行っており、テーブルとお茶菓子を囲みながら談笑する光景も見られます。時々住民の方からみかんやお菓子を頂くこともあり、和気あいあいとした雰囲気です。足湯には、心身のケアや、笑顔になれる時間、避難生活のニーズ把握、また、コミュニティ形成支援など、様々な効果があります。そのため、避難所や仮設住宅でのボランティアとして大きな役割を果たしています。

<足湯の目的・効果>

〇心のケア

近い距離感でのコミュニケーションをとり、避難生活の中で抱えていることや不安なこと、また他愛もないことを話してもらい、そして私たちはそれを聴くことで避難者の心のケアやリラックスを図ることができます。傾聴を通して、心が楽になったり、落ち着いたりすることがあります。普段なかなか口にしない些細なことでも、足湯の場だと自然と言葉になっていることがあるようです。

〇身体のケア

足湯と手の揉みほぐしによって、体を温めることができます。そのためよく眠れるようになったり、足の痛みが緩和されたり、また風邪の予防にもつながります。

〇笑顔になれる時間

避難生活で「なにもすることがない」「人と話す機会がなくなった」という声が聞かれます。しかし足湯の実施場所に出向くことや人と話すことで気分転換になり、また会話を通して笑顔が生まれます。肌と肌が触れ合うコミュニケーションだからこそ、初対面でもあまり抵抗なく打ち解けることができるのではないでしょうか。ボランティアも利用者も、お互いに楽しい時間をすごしています。

〇ニーズ把握

話を聞くなかで、困り事や要望などを聞くことがあります。大きな困り事ではないけれど、少し気になっている、ということも気軽に話せるようで、これらの声を次の支援へとつなげていくきっかけにしています。

〇コミュニティ形成支援

足湯の実施場所には、お茶菓子や机を用意しており、順番を待っている人や足湯を終えた人、またただ立ち寄っただけの人が談笑できるようなスペースを設けています。仮設住宅では周りにどのような人が住んでいるのかわからず、声も掛けにくいという問題がありますが、このような空間が知り合いを増やしたり、お互いに声を掛けあえる関係を作ってい

ったりするきっかけとなっています。この場で以前同じ避難所にいた人や、同じ集落だった人が再会する、という光景もしばしばみられました。
また、仮設住宅内で足湯活動の呼びかけを行う際に、道や玄関先での立ち話や、一人でいる方に声をかけたりすることがあります。このように住民が部屋にこもりきりになることのないような仮設訪問支援としての一面も持っていると考えられます。

※阪神・淡路大震災の時から受け継がれてきた経験や、おだがいさまセンターの方の話を参考に作成しました。

↑ビッグパレットふくしま避難所での足湯準備の様子。（2011.5 月）
通路で行った。隣には喫茶スペース「さくら」があり、人が集まっていた。

FUKUSHIMA 足湯隊のこれまでの活動（2012/1/31 現在）

日時	場所	総ボランティア数	福大生ボランティア数	利用者数	備考
2011/5/14(土)	ビッグパレットふくしま避難所(郡山)	26	3	45	
5/15(日)	ビッグパレットふくしま避難所	13	3	31	
5/21(土)	ビッグパレットふくしま避難所	22	7	45	
5/22(日)	ビッグパレットふくしま避難所	10	1		
5/28(土)	ビッグパレットふくしま避難所	12	2	32	
5/29(日)	ビッグパレットふくしま避難所	16	5	23	
6/4(土)	ビッグパレットふくしま避難所	15	5	23	
6/5(日)	ビッグパレットふくしま避難所	10	5	36	
	中の湯避難所(いわき)	2	0		
6/11(土)	中の湯避難所	2	0	11	
6/12(日)	ビッグパレットふくしま避難所	13	4		
	中の湯避難所	3	0	12	
6/18(土)	ビッグパレットふくしま避難所	12	4		
6/19(日)	ビッグパレットふくしま避難所	12	0	14	
	中の湯避難所	4	0	12	
6/25(土)	ビッグパレットふくしま避難所	7	0		
	中の湯避難所	4	0	7	
6/26(日)	ビッグパレットふくしま避難所	13	1	19	
	中の湯避難所	2	0	16	
7/2(土)	あづま総合体育館避難所(福島)	6	6	39	
7/3(日)	あづま総合体育館避難所	8	0	17	
	中の湯避難所	3	0	11	
7/9(土)	あづま総合体育館避難所	8	2		
	ビッグパレットふくしま避難所	11	0	19	
7/10(日)	ビッグパレットふくしま避難所	5	5	11	
7/17(日)	福島県農業総合センター(郡山)	7	0	16	
7/24（日）	郡山自然の家(郡山)	4	0	8	
	笹谷東部仮設住宅	6	6		
	林業研究センター(郡山)	4	0	4	
	ビッグパレットふくしま避難所	13	0	15	
7/30(土)	あづま総合体育館避難所	7	2		
7/31(日)	南一丁目仮設住宅(郡山)	13	0	29	
8/7(日)	南一丁目仮設住宅	12	0	17	

日時	場所	総ボランティア数	福大生 ボランティア数	利用者数	備考
8/8(月)	ビッグパレットふくしま避難所	4	0	14	
8/13(土)	ビッグパレットふくしま避難所	7	0	20	
8/14(日)	南一丁目仮設住宅	8	0	17	
8/15(月)	ビッグパレットふくしま避難所	6	0	38	
8/16(火)	ビッグパレットふくしま避難所	7	0	24	
8/17(土)	ビッグパレットふくしま避難所	7	0	20	
	笹谷東部仮設住宅(福島)	8	6	17	
8/18(木)	ビッグパレットふくしま避難所	8	0	33	
	富田仮設住宅(郡山)	3	0	14	
8/19(金)	ビッグパレットふくしま避難所	7	0	29	
8/20(土)	ビッグパレットふくしま避難所	7	0	33	
	笹谷東部仮設住宅	7	4		
8/21(日)	ビッグパレットふくしま避難所	10	0	13	
8/27(土)	ビッグパレットふくしま避難所	6	0	40	
8/28(日)	南一丁目仮設住宅	9	0	38	
8/29(月)	ビッグパレットふくしま避難所	7	0	26	
9/4(日)	若宮前仮設住宅(郡山)	9	0	23	
9/11(日)	熊耳仮設住宅(三春)	6	0	26	
9/17(土)	緑ヶ丘仮設住宅(郡山)	4	0	19	
9/19(月)	南矢野目仮設住宅(福島)	7	5		
9/25(日)	若宮前仮設住宅	7	0	25	
9/28(水)	笹谷東部仮設住宅	7	7	12	
10/1(土)	柴原萩久保仮設住宅(三春)	7	0	17	
10/2(日)	北幹線第一仮設住宅(福島)	10	6		
10/9(日)	南矢野目仮設住宅	12	9	15	
10/10(月)	南一丁目仮設住宅	4	0	11	
10/16(日)	石神第一仮設住宅(本宮)	10	9		
10/22(土)	北幹線第一仮設住宅	7	4		
10/23(日)	平沢仮設住宅(三春)	7	0	12	
10/30(日)	沢石仮設住宅(三春)	6	0	13	
11/6(日)	石神第一仮設住宅	5	5	13	
	もみじ山仮設住宅(三春)	4	0	5	
11/12(土)	富田仮設住宅	4	0	13	
11/13(日)	南矢野目仮設住宅	12	4	13	午前中実施
	笹谷東部仮設住宅			9	午後実施

日時	場所	総ボランティア数	福大生 ボランティア数	利用者数	備考
11/20(日)	宮代第一仮設住宅(福島)	8	6	12	
11/26(土)	大玉村仮設住宅	6	0	16	
12/4(日)	石神第一仮設住宅	7	7	5	
12/10(土)	南一丁目仮設住宅	4	0	10	
12/11(日)	南矢野目仮設住宅	9	8		午前中実施
	笹谷東部仮設住宅				午後実施
12/18(日)	宮代第一仮設住宅	8	8	16	
	南一丁目仮設住宅	5	0	19	
12/25(日)	緑ヶ丘仮設住宅	8	0	18	
12/28(水)	旧飯野小学校仮設住宅(福島)	12	8	5	大望年会後に実施
2012/1/8(日)	富田仮設住宅	5	0	12	
1/14(土)	石神第一仮設住宅	6	2	6	
	熊耳仮設住宅	7	0	8	
1/15(日)	北幹線第一仮設住宅	11	5	24	
1/22(日)	南矢野目仮設住宅	11	8	11	
	旧明治小学校仮設住宅(福島)	6	6	13	
	若宮前仮設住宅	5	0	16	
1/28(土)	旧松川小学校仮設住宅(福島)	4	4	6	
1/29(日)	宮代第一仮設住宅	9	8	13	
	好間仮設住宅(いわき)	3	0	12	
計		689	198	1373	

※足湯利用者の集計が不可能の際はカウントしていません。

【ビッグパレット足湯実施マニュアル】

用意するもの
（お湯をわかす）： ガスボンベ（A ホール）、コンロ、鍋、チャッカマン、ひしゃく
（足湯場所へ）： ブルーシート、いす、おけ、バケツ、入浴剤、ペットボトル水（水道水）、紙コップ、消毒、ゴミ袋、ウエットティッシュ、ペーパータオル、タオル（新品、ぞうきん）、つぶやきシート

	項目	内容	場所
9:15	集合	ボランティア登録を行なう	C ホール
9:30	ミーティング	リーダーから今日の場所や班分けの指示 ・1 階 B ホール ・2 階　さくら隣、もしくは通路 （状況によって決めて下さい） ・お湯を沸かす組は、すばやく準備、お湯沸かしに入る（プロパンが重いので、男子 2～3 人がよい） ※足湯ボラ初参加の方には、資料があります。時間があるときに足湯実技講習を行なって下さい。	空いている会議室使用
9:45	各場所で足湯準備開始	・足湯場所設営班と、足湯ポスター班に分かれる。 ・ポスター班はポスターをわかりやすい場所に貼りながら宣伝を行なう。	・1 階 B ホール ・2 階喫茶となり or 通路
10:00	足湯開始 （午前）	・足湯が終わったら、足湯のお湯を捨てる。トイレの掃除用具の排水または便器に捨てる。自分の手も、おけもきちんと消毒する。 ・その後つぶやきカードを書く。お湯の場所に行き、湯番の人と交代するのが望ましい。つぶやきカードを書きつつ、火の番をする。 ・適宜、足湯の宣伝を行なう。1 階の場合は、1 階全域、B ホールは、カーテンが閉まっているところにも声かけるよう努力する。2 階の場合は 2 階と 3 階にも声かけを行なう。	・1 階 B ホール ・2 階喫茶となり or 通路 ・お湯
12:00	足湯終了 （午前）	・12 時前になったら、お客さんの入りを見て火を止める。 ・簡単に片づけをし、午後に備える。また、足湯の荷物を置かせてもらっているので、その近くで交代で昼食を取る。特に火の場所は危ないので、だれもいないことがないようにする。 ・炊き出しが余る場合があるので、まだまだ余裕がありますという放送が流れたらもらいに行ってもよい。	・1 階 B ホール ・2 階喫茶となり or 通路 ・お湯
13:30	足湯開始 （午後）	・15:30 近くになったら、お客さんの入りを見て火を止める。	・1 階 B ホール ・2 階喫茶となり or 通路 ・お湯
15:30	足湯終了 （午後）	・来たときよりもきれいに片づけて終了。 ・ポスターをはがす、もしくは明日の時間を入れておく。 ・プロパンは A ホールへ。その他は C ホールのいつものスペースへ。	・1 階 B ホール ・2 階喫茶となり or 通路 ・お湯
16:00	ふりかえり	・2 か所で足湯を行なったならば、2 つに分かれてふりかえりを行なう。 ・進行は各リーダー、記録はだれでもよい。記録用紙は、足湯日報へ記入。 運営についての意見、気になるつぶやきを共有する。 ・2 か所で出た意見を共有して終了。	C ホール空いている会議室使用
17:00	終了	・腕章をおだがいさまセンターに返す。時間がある人は、ぞうきん洗いを行なう。	

【仮設住宅足湯実施マニュアル】

用意するもの
（お湯をわかす）： やかん ※集会所のコンロが使用不可の場合、カセットコンロ、ボンベ
（足湯場所へ）： ブルーシート、いす、おけ、バケツ、入浴剤、ペットボトル水（飲料水）、紙コップ、消毒液、ゴミ袋、ペーパータオル、タオル（新品、ぞうきん）、つぶやきカード

	項目	内容
9:00	集合	・自治会長さんにあいさつ
	ミーティング	簡単な自己紹介、リーダーから今日の日程の指示。
9:20	足湯準備開始	・足湯ボラ経験者は足湯実施場所の設営。 ・テーブル、座布団を用意し、お茶を飲めるスペースを作る。※できればお茶菓子も。 ・初参加の方には、足湯実技講習、手順説明を行なう。 ・ポスターを作成し、集会所の外側に貼る。 ・一通り終わったら、呼び込みに行く。
10:00	足湯開始 （午前）	・足湯が終わったら、足湯のお湯を捨てる。トイレの掃除用具の排水または便器に捨てる。自分の手も、おけもきちんと消毒する。 ・その後つぶやきカードを書く。お湯の場所に行き、湯番の人と交代するのが望ましい。つぶやきカードを書きつつ、火の番をする。 ・適宜、足湯の宣伝を行なう。外に出ている人と話したり、通路を通って大きな声で呼びかけたりする。
12:00	足湯終了 （午前）	・12 時前になったら、お客さんの入りを見て火を止める。 ・簡単に片づけをし、午後に備える。 ・昼食
13:00	足湯開始 （午後）	・15:00 近くになったら、お客さんの入りを見て火を止める。
15:00	足湯終了 （午後）	・来たときよりもきれいに片づけて終了。 ・ポスター、掲示板の広告をはがす。
15:30	ふりかえり	・進行は各リーダー、記録はだれでもよい。記録用紙は、足湯日報へ記入。 運営についての意見、気になるつぶやきを共有する。
16:00	終了	・ゴミは持ち帰る。 ・掲示板の広告を忘れていないか確認。 ・自治会長さんにあいさつ

【つぶやきの紹介】

<つぶやきとは>

足湯活動を通しての利用者の発言を「つぶやき」と呼んでいます。つぶやきは「つぶやきカード」に、足湯実施者の記憶している範囲で、話した言葉そのままを書き留めており、今後の支援のきっかけにしたり、住民の現状を共有したりしています。ここでは実際に書き留めたつぶやきを記載し、避難の現状について考察していきたいと思います。

<つぶやきから見えた現状>

○「息子が原発にいるの。ここにいると、視線がすごいの。しょうがないけどね。仕事つらいのは我慢できるけど、やっぱりね…」（5 月・ビッグパレットふくしま）

考察）身内が原発に勤めている人が居づらい空気

原発事故が原因で避難生活を余儀なくされた人がいる一方、原発に職や財政を頼っていたということも事実であるため、複雑な心境だと語る方がたくさんいたように感じます。身内に原発関係者がいて他の人に合わせる顔がないために、車の中で避難生活を送る方も実際にいたそうです。

○「ここは蒸し暑くて大変ね。冬も寒いの？子どもをプールに入れてあげたいけど、放射線が…」（7 月・あづま総合運動公園）

考察①）環境の変化についていけず、体調を崩してしまう

避難してきた方々の故郷は福島県の浜通り地方で、夏は涼しく、冬は暖かい気候の土地です。しかし、避難先の中通りは盆地で、夏は蒸し暑く、冬は寒さの厳しい地域です。そのため、気候についていけず、体調を崩してしまう方がいました。夏場は暑さだけでなく、冷房のかけすぎによって体調を崩すこともありました。冬場は慣れない雪で転んだり、車のタイヤを冬タイヤに交換するのが遅くなったりしたようです。また厳しい寒さに戸惑っているようです。

考察②）避難先でも放射線が懸念される

放射能からの避難先にもかかわらず線量が高く、結局、外遊びやプールの利用ができない状況にありました。これは避難者だけではなく、福島市民にとっても未だ解決しない問題です。

○「こうやって人と話すのは楽しいわね。部屋の中にいても、することがないし、落ち込んじゃうもの。」（8 月・笹谷東部仮設住宅）

考察①）人との接触が少なく、孤独化しやすい

仮設住宅に移った方々のなかには、家族と離れて暮らす、或いは家族が仕事に出ている昼間を１人で過ごす高齢者も少なくありません。また、家にこもりがちになってしまう

ことで周囲から孤独化してしまう危険性があります。人と話す機会を積極的に設ける必要があると感じました。

考察②）することがなく、生きがいを感じない

自分の庭も畑も趣味の道具もない生活で、何もすることがなく、一日中寝て過ごすという声を何度となく聴いてきました。自分の生きがいとなるものがないため、生活に活気が生まれず、自分から行動を起こすことが少なくなるのではないかという問題があります。

○「テレビや新聞は良いところばかり映して、本当に大変なところは映してくれない。本当にひどかったんだあ…」(9 月・南矢野目仮設住宅)

考察）メディアで報道されない実態がある

「トイレの数は足りないしご飯もろくに食べられなかった。薬が切れて、もらいにいったが金を払わないと渡せないという。みんな着の身着のままで飛び出してきたから、金なんてあるわけないのに」足湯をしながら話をしていると、聴いていて本当に心が痛むほどのことを話してくださることがあります。震災の悲惨さ、個々人の想いなど、メディアで伝える以上に悲惨な現実があったことを思い知らされます。報道を見るだけで震災について知った気持ちになるのではなく、実際に声を聴いて真実を知り、思いをくみ取ることの必要性を感じました。

○「お風呂、寒いよ。追いだきないから。」（1 月・南矢野目仮設住宅）

考察）お風呂が不便で、また冬場は冷えてしまう

仮設住宅のお風呂が寒い、という声をよく聞きます。追いだきがなく、沸かしたお湯がすぐにぬるくなってしまうそうです。そのため体が冷えたり、入浴をためらったりしてしまいます。また、繰り返し沸かして使用できないため、水がもったいないという話もあります。

○「(一通り揉みほぐした後に)もう終わりか!?ちゃんとやれよ～(笑)」(1 月・宮代仮設住宅)

考察）冗談を言われるほどに仲良くなれた。楽しい雰囲気ができている

足湯をしていて、つらいつぶやきや、困り事ばかりが聞かれるわけではありません。何度か足湯をさせていただいて、顔なじみになっている方のつぶやきです。この時はとても楽しく、笑いが尽きない雰囲気でした。冗談やクレームを言ってくることが仲良くなれた証拠なのではと感じます。その場にいた人もみんな笑っていて、楽しくコミュニケーションをとることのできるいい時間でした。

ROADプロジェクト足湯隊　つぶやきカード

聞き取り者名 池田里実　所属 福医大		2012年2月4日（土）
聞き取り場所 北幹線仮設住宅		
性別 女	年齢（何歳代） ?	名前・あだ名（分かれば） あさこさん

つぶやき

足湯ははじめてきたのよ。浪江と違ってこっちは雪降るからねぇ。雪かき1日に3回もやったのよ。若い人は肌ツルツルねぇ。年歳とるとこうなるのよ。
浪江では野菜作ってたのよ。何でも作ってたよ。こっちに来てからは作ってないからね。
あたしは請戸の地区の人なのよ。海の近くだからもう何もないよ。一時帰宅で行ったって、何もないんだもん、意味がないよね。津波なんて思いだしたくないねぇ。
しいやぁ、手ほぐれたぁ。野菜作らないと手動かさないからねぇ。ありがとうね。

考・感想

浪江で近所だった方たち5人で来てくれて、みんな楽しそうに笑っていてよかった。
足湯がみんなの楽しみになってくれたらうれしいなぁと思った。

↑つぶやきカード。箇条書きや「～だそうだ」などと書かず、発した言葉そのままを書く。
方言や口調が伝わるため、会話の内容のほか話した時の雰囲気を感じ取ることもできる。
　例）「冷え症でね、手も足も冷たいの。電気毛布掛けないと寝られなくて。」

【足湯に関わった方々のメッセージ】

○松山 文紀 （日本財団 ROAD プロジェクト　足湯ボランティア担当）

震災がつなぐ全国ネットワーク（略称：震つな）は、阪神・淡路大震災以降、日本国内の様々な自然災害への被災地支援を日本財団と協働で行ってきました。この度の東日本大震災被災地支援においては、日本財団 ROAD プロジェクトの一環として日本財団災害支援チームと震つなが共同事務局を持ち“足湯”を主な活動内容として支援活動を行うことになり、震災後 1 年経つ現在でも足湯ボランティアを継続的に派遣しています。

福島での足湯の取り組みは、4 月半ばに大混乱期のビッグパレットふくしまで始まり、現在でも継続しています。福島での足湯の特徴は、かなり早い時期から地元の学生が中心となって展開していることです。この動きは、今後の足湯の広がりのモデルケースになると、期待しています。

原発事故からの避難という、福島が抱える課題は途方もなく大きいものですが、一人ひとりに向き合い寄り添う“足湯”が、避難されている方々の足だけでなく、気持ちまでも温めていることで、不安で過酷な避難生活に一時の安らぎをもたらしていることは言うまでもありません。

学生による足湯が、誰でも参加できるボランティア活動として今後も長きにわたり活動が継続していくことを期待しています。

○北村 育美 （中越防災安全推進機構　地域防災力センター　足湯コーディネーター）

私がビッグパレットふくしま避難所に入ったのは、4 月 17 日のことでした。震災から 1 か月が経過した避難所は、狭い空間に避難者が横たわっている状態でした。ここに避難している人たちは、何を考え、何をしたいのか、その声を直接聴かなくては、どのような支援が必要かわからないと思い、神戸から中越に伝わった足湯を用いることにしました。

まずは、日本財団 ROAD プロジェクトに要請し、東京から足湯ボランティアを派遣してもらいましたが、避難生活は長期化すると考え、地元の大学生が足湯に関わることで、長期的な支援が継続できると思い、地元の大学に声をかけることにしました。足湯にはいくつかの大学、専門学校が関わり、その連合体で足湯がスタートしました。この連合体を福島大学が中心となり、ネットワーク化をしてくれました。そのおかげで、現在でも福島県内で足湯活動が続いています。

双葉 8 町村をはじめ、今後もふるさとから離れ暮らす日々が続くと考えられます。私としては、みなさんがふるさとに戻る日まで、足湯を続けられたらと考えています。そのために、このネットワークを継続させること、後輩に足湯を引き継いでいくこと、これをみなさんにお願いしたいと思います。これからも足湯続けていきましょう！

○戸井 大就 （東京学芸大学　教育学部３年）

東京学芸大学、2 年の戸井大就です。僕は 1 月 29 日に行われた宮代第一仮設での足湯ボランティアに参加させていただきました。

実は、福島に行くのが初めてで福島がどんな感じの場所なのか知らなかったのですが、福島駅の窓から外を見てみたら、一面、雪で真っ白で愛知出身で雪をあまり見たことのなかった自分はとても感動しました。

足湯活動では、県外から来た自分を福島大学ボランティアセンターの皆さんや、宮代第一仮設の方々が温かく迎えてくださって、いろいろなお話をしてくださり、とても楽しく活動に参加することができました。

そのなかで、「自分の故郷の町はもう放射能のせいでもうゴミ置き場にしかならないと言われてショックだった。」というお話がとても印象的でした。現在も、放射能の影響で立ち入り禁止になっている地域が多くありますが、いつかは元通りになる日が来ると思います。しかし、それが何年後なのか、何十年後なのか、いつになるかはわかりませんし、町がどのような状態なのかもわからないと思います。それでも、そのときのために何ができるのか考えたりすることは遠方にいる自分にもできることではないのかなと思いました。

○田仲 裕佳理　（福島大学　人間発達文化学類１年）

私が初めて足湯ボランティアに参加したのは昨年の 6 月 4 日であった。郡山の避難所へ行った。私がその時に感じたのは、避難している人の気持ちを理解することは難しいということである。震災での体験を語ってくれる方もいたが、中にはあまり話さない方もいた。こちらからいろいろ質問することも出来ず、少し戸惑ったのを覚えている。しかし、足湯ボランティアに携わっている北村さんという方から、「聞く」ことが大事だということを教わった。相手が言うことをこちらが真摯に受け止めることで、少しでも相手の気持ちに寄り添えるのではないかと感じた。

それから私は何回か避難所や仮設住宅へ行って足湯ボランティアに参加した。仮設住宅で足湯を行うようになってから感じたことは、震災での体験談を話してくれる方が多くなったということである。それはつまり、少しずつ心の中が整理されてきたと同時に、心の中にたまっているものがあるということを示唆しているのではないかと感じた。足湯ボランティアは「聞く」ことを重視しているが、こういった今こそ仮設で暮らしている方とコミュニケーションをとりながら、心の内を吐き出してもらう機会としていく必要があるように思う。

【足湯活動の課題と、今後の展望】

FUKUSHIMA 足湯隊を結成してから、様々な試行錯誤を繰り返し、多くの方々のアドバイスを頂きつつ活動を継続してきました。何度か足湯やそれ以外の活動で入っている仮設住宅では顔見知りの方が増え、地元の学生がボランティアを継続し、寄り添っていくということが実現できているように思います。学生自身も住民の方とお話をすることで勉強になったり、楽しく過ごしたりしています。しかし、まだまだ課題点があります。

〇課題点

・初めて参加する学生が、話題に困る

何を話せばよいのか・また触れてはいけない話題があるのではないか、と戸惑いがみられました。この課題は、話に耳を傾けることが大切だということ、会話が途切れてしまっても手を揉みほぐしているため、気まずく感じなくてもよいことを学生に伝え、当たり障りのない話題の例を事前に挙げることで解決していますが、毎回確認する必要があります。

・つぶやきカードのデータ化が進まない

回収したつぶやきはパソコンを使用してまとめていましたが、それが滞ってしまっています。今後、手分けして入力し、まとめていきます。

・県内各地での学生の確保

福島県内で、それぞれ自分の住む地域の仮設住宅で足湯を実施することが望ましいのですが、現在は福島市内と郡山市内の学生で動いているのみです。会津やいわき等に呼びかけ、各地で活動が継続されるよう働きかけていきたいと思います。

・足湯に来ない住民へのアプローチ

何度も足湯に参加してくださる住民がいる一方で、足湯があることを知らない方がいらっしゃるので、掲示板以外にも回覧板の活用等で周知を進めていきたいです。また、なかなか家から出てこない(或いは出て来ることができない)方がいらっしゃいます。今後、どのような方が来られないのか、どのようなアプローチをしたらよいのかを考えていく時期なのではないかと思います。会場に来なくても、立ち話でも構わないので声をかけ、コミュニケーションをとることを大切にするという活動の必要性を感じています。

先の見えない避難生活への支援の在り方として、住民にそっと寄り添い、長期的な支援を行っていくために、これらの点をひとつひとつ改善しつつ来年度以降も活動を継続していきたいと考えています。そしてより多くの箇所で足湯を実施できたらと思います。

※p.〇の「足湯のやり方」は被災地 NGO 協働センター(神戸)から提供していただきました。

6. 福大ボラセンの協力者

6-1. 福大ボラセンと連携・協力していただいた団体・個人（50 音順）

（2012 年 1 月 31 日現在）

団体名	関わった活動
愛チカラ	三重サマーキャンプ
いいだてまでいな 1 日実行委員会	飯舘村までいな 1 日
飯舘村教育委員会	飯館村親子リフレッシュ事業
一般社団法人 Think the Earth	望年会
一般社団法人 Bridge for Fukushima	相馬支援（物資搬入・泥出し）
今泉英之	望年会
うつくしまふくしま未来復興支援センター	シンポジウム
大山千枚田保存会	望年会
NPO 法人シャローム	炊き出し、物資搬入
NPO 法人まごころサービス福島センター	炊き出し
NPO 法人レスキューストックヤード	防災フェスタ
おだがいさまセンター	足湯
㈱オーマ（Ready for?）	望年会
㈱下田商事下田英一	望年会
㈱JTB 東北	サマーキャンプ
㈱東京急行電鉄佐藤雄飛	望年会
㈱東急グルメフロントしぶそば	望年会
㈱らでぃっしゅぼーや	望年会
京都災害ボランティア支援センター	泥出し、飯舘村までいな 1 日 足湯、望年会
公益財団法人日本財団	足湯
㈲新城酒店	望年会
財団法人福島県国際交流協会	結・ゆい・フェスタ
清水学習センター	ひまわりプロジェクト
社会福祉法人飯舘村社会福祉協議会	物資搬入、足湯、芋煮会、望年会
社会福祉法人郡山市社会福祉協議会	泥出し（台風・洪水）

団体名	関わった活動
社会福祉法人浪江町社会福祉協議会	物資搬入、足湯、ﾊﾞｰﾍﾞｷｭｰ、芋煮会、望年会
社会福祉法人二本松市社会福祉協議会	物資搬入
社会福祉法人福島県社会福祉協議会	ふくしま復興支援学生ネットワーク
社会福祉法人福島市社会福祉協議会	ボランティア保険関係
松月堂菓子店	望年会
新地町災害ボランティアセンター	泥出し
日本イラク医療支援ネットワーク (JIM-NET)	サマーキャンプ
武田昌広	望年会
丹治商店	福大避難所、バーベキュー
只見町役場	臨時職員
平良ひとみ	望年会
福島県中小企業家同友会 FMD 委員会	FMD 委員会、秋祭り（とっておきの音楽祭）
福島大学生活協同組合	福大避難所、芋煮会
水下青果	望年会
任意団体 Link with ふくしま	望年会
三重学生災害支援団体「team M」	サマーキャンプ
明治大学浦安ボランティア拠点	浦安ボランティア（被災地連携）

6-2. 福大ボラセンと連携・協力していただいた方々の声

【原稿作成依頼者一覧】

福島大学避難所避難住民対策班長地域連携課長　千明 精一

人間発達文化研究科教職教育専攻カリキュラム開発領域 2 年　堺 秋彦

福島大学生協食堂部職員　河野 米子

福島大学人間発達文化学類 22 年度卒業生　宮澤 香寿美

三重大学医学部 4 年　脇坂 太貴

三重大学医学部 3 年　水門 瞳

JIM-NET 福島プロジェクト事務局　小玉 直也

一般社団法人 Think the Earth　コーディネーター　原田 麻里子

Link with ふくしま　代表　菅家 元志

京都災害ボランティア支援センター　桐山 義章

龍谷大学復興支援プロジェクト東北こども会　真鍋 元

同志社大学経済学部 2 年　谷 勇哉

明治大学商学部 2 年　藤重 光希

福島県庁職員　天野 和彦

福島県中小企業家同友会福島地区 FMD 委員会委員長
株式会社山川印刷所　代表取締役社長　立花 志明

『学生ボランティア活動への感謝と期待』

福島大学避難所避難住民対策班長　地域連携課長　千明 精一

昨年の 3 月 11 日午後 2 時 46 分、東北地方太平洋三陸沖を震源として発生した東日本大震災によって福島県は甚大な被害を受けました。さらに、東京電力福島第一原子力発電所の 1 号機建屋と 3 号機建屋の爆発によって放射能が放出され、浜通り地区住民の自主避難や集団避難が始まりました。福島大学は、第一体育館、第二体育館と合宿研修所に避難所を設置して、3 月 16 日から 4 月 30 日まで多くの避難者を受け入れました。避難所開設当初から多くのボランティア学生が参加し、様々な支援活動に取り組んでいただきました。家族構成に応じた段ボールでの区画づくり、生協食堂での食事準備、バレーボール大会、卒園式・卒業式、植樹、フリーマーケットや花見など、避難者に寄り添ったイベント等が実施できました。避難所生活における安全・安心を確保できたことを避難所の運営班長として大変感謝しております。避難所閉所後は、学生ボランティアの活動は仮設住宅等での活動へと移りましたが、足湯活動など多くの支援活動が引き続き実施されています。

また、避難所で活動した学生ボランティアメンバーが中心となって学生団体「福島大学災害ボランティアセンター」を立ち上げ、県内大学生ボランティアネットワークが構築されるなど、素晴らしい活動につながっており大変うれしく思っております。

福島県の避難者は、仮設住宅や借上げ住宅等での長期にわたる避難生活が余儀なくされています。避難者に寄り添った支援活動を今後も実施されるとともに、皆さんの想いと支援活動が後輩へ確実に継承されていくことを期待しております。

万一、災害が発生した際には、皆さんは、地域会社の復旧・復興リーダーあるいは災害ボランティアリーダーとして活躍する人材であると確信しています。

『こどもの健やかな成長を願って』

人間発達文化研究科教職教育専攻カリキュラム開発領域 2 年　堺 秋彦

私が初めて避難所を訪れたのが、4 月 1 日であった。震災からちょうど 3 週間が経っていた。

「避難所にいる子どもたちの活動を面倒見ないか」という話をいただき、「是非に」という気持ちではじめたボランティアであったが、いざ避難所を訪れるとそこは子どもたちにとっての「無法地帯」と化していた。

子どもにとっては普段と違う環境が新鮮で楽しくまた、お菓子も飲み物もいつ何時も口にできる環境であった。

保護者の方は心身ともに疲れ切っている様子で、先の見通しも立たない状況のなか、子どもの面倒にまで気持ちに余裕がない状態である。

そのような様子をみて、「今」この子たちにとって、また子をもつ親にとって私は何をすべきかを考えた。

その答えが「避難所幼稚園」をつくることだった。人格形成の基礎を培う大切な時期に、子どもたちに「教育」をすることが子どもにとっても親にとっても最善であると考えた。周囲には被災者の身の周りの世話をしてくれる心温い学生ボランティアの方たちがいてくれた。そのお蔭で、私は存分に子どもたちと触れ合い、愛情を注げられた。

避難所が閉鎖されてからも今なおボランティア活動を続けている学生のみなさんと学内でお会いすると、心が癒される。

それはきっと、同じ志で共に活動できたからこそだと感じている。ボランティア活動をしている皆さん、これからも活動頑張ってください。

そして、被災された方たちがいつかきっとまた心から笑える日が来るのを祈っています。

『震災時のボランティア活動について』

福島大学生協食堂部職員　河野 米子

地震の被害が少なかった食堂は、すぐに再開出来ると思い、断水した食堂に自家水を運んだりして待機していました。まさか原発事故で避難を余議なくされる事が起こるなど無知な私には、想像もしていませんでした。ある日から食堂の一角が避難者の方々の食事の場所となり、学生の皆さんのボランティア活動が開始され、私も食堂職員として出来る事、また個人としてやれる事を一緒にやらせて頂き、多くの事を学びました。「ありがとう！」・「ごちそうさまでした。」・「お世話さま」被災者からの感謝の言葉を貰うたび、世話が出来る自分は、幸せで申し訳なくとても辛くなりました。でも、学生の不慣れな手で食事の支度をしている姿や子どもたちの世話をする様子を見ている内に無償の奉仕が伝わって来て、被災者の方々とボランティア活動する学生の為に自分が必要とされる事を精一杯頑張り続けました。「ボランティア活動」誰にでも出来るけど、続ける事は、大変です。それを続けてくれた学生の皆さんを私は、誇りに思います。

『支え合い』

福島大学人間発達文化学類平成 22 年度卒業生　宮澤 香寿美

福島大学の避難所では、温かい料理を配給できることが誇りだった。避難所が開設された当初は、配給されてくるパンやおにぎりを配るだけだった。だが、寒さが厳しく、利用者の方は一日中体育館の中で過ごしていたので、身体も冷えきっているだろうと思い、何か温かいものを提供できないかと考えたのが始まりだった。初めて作ったのは、カレーだ。寮生に声をかけ、材料を集めた。体育館の中にカレーのにおいと湯気が舞った。「ここに来てこんなものが食べられると思わなかった。」「ありがとう。」あのとき初めて利用者の方の心からの笑顔を見ることができたと思う。うれしかった。私もあのときが、震災後初めて手作りの温かいものを食べた日だった。当たり前のように食べていた食事がこんなにも大

切で、簡単に手に入るものではないのだということを改めて考えさせられた。その日から「夜だけは何か作ろう！」となり、次第にお昼、そして朝食も作るようになった。初めはボランティアメンバーで作っていたが、利用者の方にも協力を願い、多いときには 100 名以上の食事を準備した。

地震が起きて失ったもの、困ったこと、それはもちろんたくさんあるが、逆に地震が起きたからこそ知り合えた出会い、気づいたこともたくさんある。福島大学の避難所は多くの方の支えがあり運営できた。全国の国立大学を初め、様々な地域から支援物資を送っていただいた。利用者の方を励ましに、歌や音楽、笑いを届けに来てくださった方や、炊き出しに来てくださった方もいた。私たちが毎日温かい食事を配給できたのも、食材を提供してくださった方や、ほっかほかのごはんを炊いてくださった方の協力があったからこそである。そして何よりも、利用者の方が、手の行き届かなかった点もあったはずなのに、文句ひとつ言わず、広い心で私たちに協力してくださった。本当に感謝している。このような人と人とのつながり、支え合いをこれからも大切にしていきたい。

『福島に触れて』

三重学生災害支援団体 teamM　三重大学医学部４年　脇坂 太貴

私は、去年の 3 月 11 日から学生災害支援団体 TeamM の一人として活動し、GW のボランティア、夏休みのサマーキャンプなどに参加させて頂きました。GW の際には、がれき撤去や避難所訪問を、福島大学生をはじめとするボランティアセンターの方々の仲介を経て参加、キャンプの時にはボランティアセンターをはじめとする多くの学生と一緒に活動しました。

その時に強く思ったのは、そのセンターの彼らが日本のどこの地域の大学生よりも真剣に、笑顔で、かつ活力にあふれていたことでした。それの確証はありません、しかし、個人的には確実に、というよりも確信的なものでした。それは、誰がというわけでなく、誰もが目標に対して全力に取り組んでいたから、と思います。現場を知らない人間が一番悲観的・批判的で現場の人間こそが一番行動し、活力があるということを震災当時よく聞きましたが、彼らのエネルギーは、復興はもちろん、そこからの発展にもつながっていくように思いました。言うまでもなく、その彼らの人柄も最高に面白い人ばかりで、彼らと協力し、復興の一助となれたことを本当にうれしく思います。

『福島へ』

三重学生災害支援団体 teamM　三重大学医学部 3 年　水門 瞳

福島県の子どもたちに放射線を気にせず、思いっきり外で、海で遊んでもらいたいと三重でのサマーキャンプを企画、福島大学の協力のもとにフェリーではるばる三重まで来てもらいました。当事者とは言えない私たちは、自分たちの企画やちょっとした言動が思ってもみないような風にとらえられ、不快な思いをさせるのではないかと心配な思いを胸に、キャンプに臨み、福島の学生、教員、子どもたちを迎えましたが、子どもたちはすぐに私たちの心配を彼らの無邪気さと笑顔で吹っ飛ばしてくれました。あの笑顔のための背景には、一緒に移動していただいた福島大学の方々のたくさんの努力があったのだと思います。実際、子どもたちはフェリーの中で一緒に遊んでくれたお姉さんお兄さんのことをとても楽しそうに話していました。帰る直前、「来年もやってね！」と無邪気に言ってくれた時の、胸が温かくなった感じを今でも鮮明に覚えています。何より私自身が、かけがえのない幸せな時間を過ごさせてもらえたことに感謝です。福島に大切な友達もできて、気軽に福島に行けるきっかけにもなりました。これからも、福島と三重、つながっていきましょうね。

『福大ボラセンとの活動を通して』

JIM-NET 福島プロジェクト事務局　小玉 直也

福島大学ボランティアセンターのみなさん昨年は震災後に避難所になっていた福島大学で始まったボランティア活動を通して、子ども達から高齢者にいたるまで被災者に心を寄せ奮闘してきましたね。そんな皆さんに私たち JIM-NET はサマーキャンプの支援を通じて皆さんと活動を共にしてきました。サマーキャンプに参加した子ども達の笑顔に触れ、本当に協力できて良かったと感じました。同時に、子ども達の放射能への不安や悩みも感じとる事にもなりました。また、企画の成功と共に、その後も仮設での足湯ボランティアなどの活動を見ながら、学生のみなさんの成長ぶりは目をみはるものがあり、社会との関わりで無関心な若者が広がっている昨今、みなさんから希望の光を見れました。JIM-NET はイラク戦争で使用された劣化ウラン弾の影響と思われる、放射能に苦しむ子ども達の支援をするために立ち上げ活動をしてきました。チョコ募金を通じてイラクへの医療支援をしてきた経験を生かして、昨年 7 月から福島プロジェクトを立ち上げました。今後も原発事故の影響に苦しむ福島の人達のサポートをしていく予定ですのでよろしくお願いします。

『まわりを巻き込む活動を』

一般社団法人 Think the Earth　コーディネーター　原田 麻里子

きっかけは2011年7月に行われた「ふくしま被災者支援ネットワーク」のシンポジウム。Think the Earth のスタッフが福大ボラセンの皆さんの活動を知ってコンタクトをしたのが、お付き合いの始まりでした。その後、10 月に私たちが東京で主催した「震災のここから・これから」というイベントに来て、報告をしてもらったのですが…岩手や宮城に比べて圧倒的に情報が少なかった福島からの発信は、それはそれは貴重なものでした。

そして 11 月某日。福島駅から徒歩 3 分の某居酒屋で、望年会の話で盛りあがり「やるなら協力するよ！」と調子よく言った私たちは、年越しそばにうどん・もち米にお酒に野菜と、材料集めのお手伝いをさせていただきました。年越しそばやお稲荷さんの揚げを提供してくださっただけでなく、社員の方が望年会当日に足を運んでくださった東急グルメフロントさんをはじめ、ほんとに多くの個人や会社の方々にご協力いただきました。この場を借りて、感謝申し上げます。

もうすぐ 1 年が経ちますね。そして、また 1 年が始まりますね。いま、皆さんの地道な活動の甲斐あって、足湯を楽しみにしている方々も増えているのではないでしょうか。ぜひ、これからも活動を続けていってください。そして、壁にぶつかることもあるかもしれませんが、若者ならではの無謀さとパワーで、良い意味でまわりを巻き込んでいってください。福大ボラセンのみんながいてくれるから、現場のリアルを教えてもらえるのです。

『「若さ×現場」というボラセンらしさ、を活かした今後の活動に関する期待』

Link with ふくしま代表　菅家 元志

ボラセンの皆さまとは昨年末に開催された仮設住宅での望年会プロジェクトでご一緒させて頂きました。その際に感じたこととして、福大ボラセンの皆さまの活動は、「若さ×現場」という他の団体や個人では、なかなか真似できない特長を持っていることです。私たち「Link with ふくしま」も大学生・院生が中心となって構成される団体ですが、福大ボラセンとの違いとしては、拠点が東京にあることに加え、現在の活動内容も中間支援団体としての色が強いです。一方、福大ボラセンの皆さまの活動は仮設住宅など復興の現場で活躍されていることに加え、そこに学生ならではのエネルギーや勢いが他の団体には真似できない、福大ボラセンならではの特長だと思います。今後も、福大ボラセンの皆さまには、この「若さ×現場」という強みを活かした福大ボラセンらしい活動を継続して頂くことに加え、皆さまが考える現場の課題・ニーズや、気づき・学び、悩みなどを積極的に外部に対して発信して頂ければと強く思います。その際には、是非、私たち、Link with ふくしまも協力させて頂き、福島の復興に向けて少しでも力になれればと思います。今後も福大ボラセンの皆さまの末永いご活躍を期待しております。

『福島大学の皆さんへ』

京都災害ボランティア支援センター　桐山 義章

初めて福大を訪れたのは地震から 2 週間ほど経った頃でした。日が落ち、雪が降っていたのを覚えています。そして、私が初めて訪れる「避難所」でした。自らも被災しているにも関わらず献身的に避難所運営の為に活動する皆さんを見て、「私ができることは何だろう？」と果てしない不安に襲われたのを覚えています。

それから 1 年、皆さんと共に活動して、ふと気づいた事があります。まだ 1 年ですが、もっと昔から知り合っていたかのような不思議な感覚。年齢も離れているのに、まるで私も福大の学生なんじゃないか？とさえ思ってしまうほどです。なるほど、これが皆さんのチームワークの源なんだな・・そう信じて疑いません。

皆さんが様々な活動で福島の為にがんばっている姿を見てきた者として、その活動に少しでも参加させて頂けたことを誇りに思っています。むしろ、皆さんの活動があったからこそ、私たちも活動できたのですから、心から感謝しています。ありがとう。

福島の未来には皆さんの力が必要です。私にとっても皆さんの力が必要です。京都と福島は離れていますが、心は傍にいます。とりあえず 1 年間、お疲れ様でした。そして、これからも共にがんばっていきましょう！

『すざく 1 番隊に参加させていただいて感じたこと』

すざく 1 番隊リーダー　龍谷大学復興支援プロジェクト東北こども会　真鍋 元

僕が福島大学災害ボランティアセンターさんと関わるようになったきっかけは、京都の学生で編成されたすざく 1 番隊に参加したことがきっかけでした。南相馬市や福島市内で福島の学生さんと一緒に活動させてもらい、多くのことを学ぶことができました。そして同じ学生同士活動することで、普通に活動するだけでは気づくことのできない福島県の現状や想いについて肌で触れることができ、大きな衝撃を受けました。そうしたこともあり、活動を通じて自分たちもその想いをしっかり受け止めて京都で伝えていかなければならないと強く思いました。

今後は、京都で「東北こども会」という団体で活動していることもあるので、子どもたちを対象に福島のことに対して関わっていきたいと思っています。そして少しでもみんなに笑顔が増えるようになって欲しいです。また、すざく隊で一緒に活動したメンバーと再度、福島を訪れて何かできたらと思っています。このような機会を与えてくださったことに感謝すると共に一緒に活動できたことは、これからの人生の中で大きな出来事の一つでした。本当にありがとうございました。福島のこと大好きです！！

『継続的支援の大切さ』

すざく２番隊リーダー　同志社大学経済学部２年　谷 勇哉

京都と福島大学との繋がりは、すざく 1 番隊からのようで。僕は 2 番隊の隊長として初めて直接福大ボラセンと一緒に活動しました。活動の内容は足湯を使った傾聴ボランティア、井戸端訪問です。初めての取り組みにも関わらず、抵抗無く隊のみんなが活動出来たのはボラセンのみなさんのお陰かと思います。足湯はしっかりした形があって、そこに便乗するだけの僕たちだったです。申し訳ない半面、大変勉強出来る時間で有り難かったのが本音です。ボランティアするための組織、考え方、姿勢など学ぶべき点は多いです。その点において影響受け、感動した隊のみんなです。ボラセンの今に至るまでの活動、詳細に興味を持った私たちに説明していただく機会もいただき本当に感謝しています。学んだことを無駄にせず京都に持ち帰り、隊のみんなは引き続きボランティア関係の継続的支援に励むことが出来ています。被災者にも関わらず日本で一番頑張っている学生、福大ボラセンの皆さんとお会いでき、繋がりが出来た私たちは応援する一方、自分たちでも出来る継続的支援を実行、試行錯誤する決意をしました。私たちが一番学んだ『継続的支援の大切さ』を念頭に。また、一緒に活動出来る機会をとても楽しみにしています。

『福島大学生と活動して思ったこと・感じたこと』

明治大学商学部２年　藤重 光希

福島に実際に行ってみて、被災地のためというボランティア活動もあったが、福島大学生との交流の面が大きく、学生を中心とする福島の人々が、私たち首都圏に住んでいる人々に対してどのようなことを思っていることなどを交流の中で知れたということが良い経験となった。強く残った印象として、行く前は、福島は震災の影響で、どこかどんよりしていて元気がない印象を一部持っていた部分であったが、そんなことはなくほとんどの人が前を向いて地元の復興に取り組んでいる印象を受けた。メディアは、福島のような避難所生活は苦悩の連続でマイナスのコメントばかりを紹介するが、実際はみんな苦しんでいるどころか下を向いている人は稀で、誕生会を開いたり、足湯で体を休めたり、子どものために駄菓子屋などを作ったりと色々な面で現地の人たちは工夫をして、地域活性化をしていて元気に過ごしていたということを写真や話でたくさん知ることができた。このように私たち首都圏に住んでいる人はメディアからしかその被災地の状況を知ることができないため、実際に自分の目で見ないと分からない部分があるんだなと感じた。そして、こうして現地に行った人が、福島が安全で私たちとも全然変わらない生活を過ごしているっていうこと、また福島県全部が放射線の影響を受けていなく、むしろ関東よりも元気のパワーを持っているということを首都圏の人々に伝えることも重要であると感じた。最後に福島大生が「県外の学生たちと共に活動できていい刺激になったし、福島を支援してくれる仲

間が県外にもいることが、私たちにとっては他の何にも代えることのできない喜び、パワーの源」と言ってくれたのが嬉しかったし、それが福島大学と提携したプロジェクトとやら何かをやってみたいという意欲を湧き出した言葉でもあった。他に感じたこととして、僕が行ったのは小さな地域の祭りであったが、福大生や他大の人たちは販売に対して一生懸命で周りから見て輝いていて、自分たちが福島を盛り上げていこうっていう意識が感じられた。私たちも見習って、今後の活動において私たちにしかできない長所である「学生らしさ」というものを存分に出していかなければな、という気持ちも福島大学生が芽生えさせてくれた。

『あの日見た「希望」。』

福島県庁職員 天野 和彦

ビッグパレットふくしま避難所で運営支援をしていた私に、仕事仲間から 1 本の電話があった。聞いてみれば、姪が大学の仲間たちとボランティアをやりたいといっているのでぜひ相談に乗って欲しいという依頼だった。電話じゃ話がみえないから一度おいでなさいというと 3 人の学生が間を置かずにやってきた。避難所に開設された「おだがいさまセンター」の椅子に、前につんのめりそうな気持ちを抱え、キラキラとした眼をもって並んで座っていた光景はいまも忘れない。「足湯をやってみたらどうか」という提案に即座にうなずきその週末やってきた。その時私の中では、県内に学生たちのボランティアネットワークができないかという一つの期待があった。その足がかりがまさに足湯だった。何回目かの足湯の活動の時に、「県内の学生の足湯のネットワークができないか」と提案した。小一時間たった頃、足湯コーディネーターの方がネットワークの組織を創ることで動き始めたようですと報告してくれた。それからしばらくして、県内のネットワークの旗揚げをしますといって連絡が入った。記者会見は県庁がいいのではと、またまたお節介な提案をした。私自身は記者会見には行けなかったのだが、明くる日の新聞には、スーツ姿の若者たちの堂々とプレゼンをする写真と学生たちの復興に向けた想いの見出しが躍った。それを読みながら私は、希望というのはこういうことをさすんだなと強く思った。「福島をあきらめない」と、私自身がこの国のあちこちで発信し続けられる根拠は、あの日の「福島の希望」たちがいまも元気に活動を続けていることだ。

『これからの社会』

福島県中小企業家同友会福島地区 FMD 委員会委員長
株式会社山川印刷所　代表取締役社長　立花 志明

ボランティアって余裕のある人がするものだと思っていた。
あながち間違いではないかもしれないが、この余裕の意味は実は深い。
金銭的な余裕、時間的な余裕、体力的な余裕・・・
何かと理由をつけては「余裕ないから」と避けてしまっているような気がする。
『福島大学災害ボランティアセンター』
ボランティアに関わる学生って、不思議とそんなこと考えていないのかもしれない。
社会人になると打算的な基準で行動することも少なくない。
「何かをするのに理由なんかいらない」「見返りなんか求めちゃいない」
そんな行動があってもいいね。
自分が発した言葉は自分に帰ってくる、自分のした行動も自分に返ってくる。
与えた分だけ自分にも与えられる、愛した分だけ愛される。
自分のことは最後に、後回しに考えて行動できる。
心の余裕、人間性の余裕は絶対なくさないようにしなくてはいけない。
彼らに出会って、そうありたいと感じた。
誰かのために行動するって素晴らしいことだと思う。
人は誰かに認められたい生き物だもの。
相手のために尽くして、まず相手を認めて、そして自分も認められる。
そんな社会であったらいいと思う。

7. 各種資料

7-1. 各種報道記事

発起人の高橋さん(右から3人目)と連携を誓うネットワークのメンバー

学生ボランティアネット発足

大学・専門16校 情報共有し効率的支援

県内の大学、専門学校などの学生が連携しボランティア活動を推進する組織「ふくしま復興支援学生ネットワーク」が３日までに発足した。多様化する被災者のニーズに合わせて学生がボランティア情報を収集、共有して円滑で効率的な活動を展開する。

ボランティアを続けていた高橋あゆみさん（福島大４年）が、活動で知り合った他大学の友人に呼び掛け、６月21日に福島大で第１回会議を開いた。７校の有志約20人が集い、地域のボランティア学生がメールなどで情報交換し、連携してさまざまな要望への対応や効率的な支援を行うことなどを決めた。

現在は福島大をはじめ、郡山女子大、いわき明星大、会津大などの大学や専門学校合わせて16校の200人を超える学生が加盟し、避難所での足湯のサービスの実施や、各学校の連絡網の構築などを進めている。

今後はネットワーク会議を毎月実施するほか、県北・県中・いわき・会津の４地域に災害ボランティアネットワークをつくり地域間の連絡や活動を密にする方針。

当面は福島大災害ボランティアセンターが事務局を務める。問い合わせは同センターのメールアドレス fukudai_volunteer@hotmail.co.jpへ。

◇　◇

高橋さんらネットワークのメンバー６人は３日、福島市の県自治会館内にある県災害対策本部で記者会見した。高橋さんは「多くの学生に参加してほしい。学生が持つ情報や活動のノウハウを共有して、より良いボランティア活動を進めたい」と語った。

2011.7.4 民報新聞

2011 年 7 月 4 日　福島民報新聞

民友新聞 2011.7.4

ボランティア学生結集

県内に連携組織

若者の視点 復興後押し

4地域の情報共有

本県の復興に向け、学生の力を結集するためネットワークを設立した県内大学の学生

県内の大学や専門学校の学生が3日までに、被災者支援などのボランティア活動を全県展開するため、学生の力を結集する連携組織「ふくしま復興支援学生ネットワーク」を設立、ふるさと「ふくしま」の復興を若者の視点で後押しする。

ネットワークは、福島大災害ボランティアセンターが発起人となり設立。県北、県中、会津、いわきにそれぞれ地域ネットワークも立ち上げ、4地域の情報共有を基盤とし、各地域でのボランティアやプロジェクトなど共同活動を展開する考え。現在ボランティアに参加していない県内の学生をはじめ、本県でのボランティア活動を希望する県外の学生に対する窓口としての活動も視野に入れる。

東日本大震災を機に、県内の大学、専門学校では、学生が主体的に活動する災害ボランティアの団体が発足、それぞれの視点、能力を生かし、避難所で被災者を支援している。ただ、単独では動員力や地域的な限りがある一方、避難生活が長期化し、避難住民の要望も多様化している。

こうした状況を受け、避難所での足湯ボランティアなどを通し、交流してきた学生同士が結び付き、自分たちの活動を拡大していこうと手を取り合った。

発起人の高橋あゆみさん（福島大4年）らが3日、福島市で報道陣に設立を報告。「震災で福島の良さを再確認し、福島のために何かやりたいと思った。互いの活動を高め合いながら、学生の受け皿になりたい」と意欲を示した。問い合わせは電子メールfukudai_volunteer@hotmail.co.jpへ。

参加、参加予定校

福島大、桜の聖母短大、福島学院大、福島看護専門学校、郡山女子大、日大工学部、国際メディカルテクノロジー専門学校、ポラリス保健看護学院、いわき明星大、東日本国際大、福島高専、会津大、同大短期大学部、竹田看護専門学校、会津若松看護専門学院、仁愛看護福祉専門学校

2011年7月4日　福島民友新聞

2011.7.18(月) 読売(京都)

「ボランティア 福島へ」

現地学生 下京で活動紹介

東日本大震災の被災地・福島県で活動する地元学生ボランティアを京都に招いての報告会「現地学生が語る福島の現在」が17日、キャンパスプラザ京都（下京区）で開かれた。

福島県を訪れるボランティアが少ないため、京都災害ボランティア支援センター（同区）が、同県の実情を知ってもらおうと企画。

福島大など、現地から4人の学生が出席し、足湯サービスをしながら被災者の悩みや不安を聞いて、支援に役立てた活動などを報告。学生の一人は「『何もできない』という無力感を味わったこともあるが、未来の福島をつくっていくために、学生を始め、若い世代が上の真剣に考えていかねば」と話した。

郡山女子大3年の佐々木麻有さんは「現場に行かないと分からないことがある。被災地のことを忘れないためにも、行動に移してもらえたら」と訴えた。

◇

また、宇治市の市総合福祉会館では、京都災害ボランティア支援センターの募集に応じて、宮城県気仙沼市でがれき撤去を行ったボランティアによる活動報告会が行われた。

気仙沼市の離島で、津波被害を受けた大島で、がれき撤去などを行った5人が登壇。自営業、寺川徹さん(41)（宇治市宇治）は「被害を受けた地域の広大さ、そしてその規模から絶対的に人手が不足していると感じた。復興に向け不眠不休で活動している人たちに頭が下がった」と振り返った。

また、元小学校教諭の東郷あや子さん(62)（同市木幡）は「復旧にはおそらく5年も10年も掛かるだろう。支援の手を広げるため、知り合いに呼びかけることも大事だし、宇治の子どもたちに現地の人の思いを伝えたい」と話した。

福島の現状について語る福島県内の大学生たち（下京区のキャンパスプラザ京都）

2011年7月18日　読売新聞(京都山城版)

合意書破棄の通知文書で、町は、「一般廃棄物の排出元自治体としての責任を軽視した」と市の対応を厳しく非難。再開のめどはたっていない。

学生らタッグ、福島県産品販売

浦安できょう・あす、福島大と明大の協力

明治大の活動拠点に到着した福島大の伊藤さん、小林さん、川崎さん（前列左から）＝浦安市今川1丁目

福島大の学生ボランティア3人が6、7の両日、浦安市にボランティア活動拠点を置く明治大の学生らとともに、同市内で福島県産品などを販売する。

3人は、学生団体「福島大学災害ボランティアセンター」の伊藤航さん(22)、小林理恵さん(18)、川崎桃実さん(18)。5日に浦安入りし、明大生らと活動内容を打ち合わせたり、販売時に使うメッセージ文を書いたりした。

6、7日とも、明大生が市内のスーパー前で取り組んでいる被災地産品の販売に加わるほか、6日は明海の丘公園で開かれる夏祭りで、福島県産の桃や、復興支援のTシャツ、シールなどを販売する。7日午後2時からは、同市今川1丁目の明大活動拠点で、福島での活動の報告会も開く。

今回の交流は、明大側からの働きかけで実現した。伊藤さんは「自分たちの活動や福島の現状を伝えるとともに、液状化被害を受けた浦安での体験を持ち帰りたい」と話している。

伊達の子ら励ますきょうコンサート

白井のチャリティー

福島県伊達市の子どもたちを励ましそうと、6日午後2時から、白井市の白井コミュニティーセンターでチャリティーコンサートが開かれる。

白井市と伊達市の市民グループは1989年から、夏休みに子どもたちの交流イベントを続けてきた。4泊5日の日程で両市の子どもたちが互いに訪問し合い、魚のつかみどりや流しそうめんなどのイベントを通して絆を深めてきた。今年は福島第一原発事故の影

2011年8月6日　朝日新聞(首都圏版)

2011.
8/7
毎日

明大と福島大の学生たちが連携

震災復興支援で交流

浦安で東北の菓子類など販売

東日本大震災の復興支援に向け連携しようと、明治大と福島大の学生たちが浦安市で交流している。6日は市内のスーパーや夏祭りの会場で、福島県産のモモや東北地方の菓子類、復興支援のステッカーなどを販売した。

明大の呼びかけに応じて、学生団体「福島大学災害ボランティアセンター」の伊藤航さん(22)、小林理恵さん(18)、川崎桃実さん(18)が浦安を訪れている。

この日は、Jリーグ入りを目指すサッカーチーム「福島ユナイテッドFC」の応援Tシャツなども販売した。

伊藤さんは「浦安市の液状化被害の現状や復興への取り組みも知りたかった。学生の力を生かせるよう、県内の他の大学や首都圏の大学との交流の輪を広げたい」と話す。

7日も菓子類の販売がある。午後2時から明治大学浦安ボランティア活動拠点（浦安市今川1）で報告会を開く。福島大に設けられた避難所での活動や、津波を受けた被災地域でのボランティア不足の現状などを報告する。問い合わせは同活動拠点(047・321・6652)。

【山縣章子】

明治大と福島大の学生が東北地方の物産を販売した＝浦安市今川で

2011年8月7日　毎日新聞(千葉県版)

8/10 民友

福大と浦安で活動の明治大

被災地同士が交流

県産品など販売

夏祭りで復興Tシャツなどを販売する学生ら

福島大災害ボランティアセンターの学生らは5日から4日間、千葉県浦安市で被災地支援プロジェクトを行う明治大の震災復興支援センター「浦安ボランティア活動拠点」を訪れ、県産品の販売や活動報告会などで交流した。

浦安市を訪れたのは、福島大の伊藤航さん、小林理恵さん、川崎桃実さんの3人。

震災で液状化の被害が大きかった浦安市で活動する明治大側から、地震や津波に加え、原発事故や風評被害に苦しむ本県で活動する大学生らと被災地同士が協力して何か支援できないかと申し出があり、交流が実現した。

3人は、明治大の学生らと共に、本県産のモモや浪江町の復興Tシャツなどを、6日に開かれた夏祭りで販売、義援金などを呼び掛けた。

このほか、これまでの震災ボランティアの活動報告会や浦安市の液状化被害の現状を視察するなど交流を深めた。

伊藤さんは「液状化の現状や支援の取り組みを自分の目で見たかった。今回の交流で得たことを大学のメンバーに伝え、具体的な活動に生かしていきたい」と話した。

2011 年 8 月 10 日　福島民友新聞

9/25 毎日(新潟)

浦安民宿

協力者宅 被災者に安く提供

明治大と地元NPO開始

浦安市で東日本大震災の復興支援に取り組む明治大と同市のNPOが、東北地方の被災者を対象に、市内の協力者の住宅を安価な宿として提供する「浦安民宿」プロジェクトを始めた。被災者同士が協力する仕組みを作るのが狙いだが、関係者は「取り組みが広がれば、浦安に民宿という新たな産業が根付く」と期待している。

震災を機に設置された明治大の浦安ボランティア活動拠点（浦安市今川1）などが中心となって取り組む。今月中は使われていない市内の住宅を活用し、光熱費として1泊当たり1000円だけ受け取る。来月からは、子どもが独立するなどした高齢者らに協力してもらい、空き部屋を有効利用する。

交流も深まる新産業モデル

取材した今月11日には、東北地方の物産販売ボランティアに参加するために上京した学生団体「福島大災害ボランティアセンター」の福島大生3人と、地元で洋服店開業を目指す岩手県釜石市の吉田幾子さん(63)が滞在していた。

吉田さんは津波で夫を亡くし、自宅も全壊した。しばらく何もできなかったが、周囲から「かつて経営していた洋服店を仮設店舗で開業したらどうか」と持ちかけられ、再開を決意。今回は商品の買い付けなどのため、東京を訪れた。「安く泊まれるのが助かります」と話す。

11日朝は、学生3人が食事を作り、吉田さんを交えて食卓を囲んだ。吉田さんは「みそ汁なんて久しぶり。みんなで食べるとおいしいわね」と笑顔を見せた。2年の鹿野なるみさん(20)は「吉田さんのように自ら状況を切り開いていこうとするたくましさ、強さが、被災地で求められていると感じる」と話し、吉田さんとの交流を深めた様子だった。

明大の水野勝之教授は「浦安にも高齢の夫婦で暮らす世帯がある。民宿という新しい産業が興せるかどうか、モデルケースとしても取り組みたい」と話している。問い合わせは明大の活動拠点（☎047・321・6652）。【山縣章子】

明治大の浦安ボランティア活動拠点が企画した民宿プロジェクトで、一緒に朝食を食べて交流する利用者たち＝浦安市内で11日

2011 年 9 月 25 日　毎日新聞(首都圏版)

福島大に線量計

創業12年で寄贈

福島市のソーラーポストは九月二十二日、福島大災害ボランティアセンターに放射線量計一台を寄贈した。

同社の創業十二年を記念した社会貢献活動の一環。贈呈式は同社で行われ、尾形芳孝社長が「活動に役立ててほしい」とあいさつ、同センターの伊藤航リーダーに手渡した。伊藤リーダーは「地域の安全、安心を示すために役立てたい」と謝辞を述べた。福島大の鈴木典夫教授も同席した。

尾形社長（右）から線量計を受け取る伊藤リーダー（中央）、鈴木教授

2011 年 10 月 2 日　福島民報新聞

浪江町民と交流

福大生、仮設で「望年会」

学生団体「福島大学災害ボランティアセンター」は定期的に訪問している。一年を忘れる「忘年会」ではなく、来年への希望を込めて「望年会」として企画、仮設住宅内のコミュニティーづくりと心のリフレッシュを目的に開いた。

学生と住民ら約40人が参加。学生たちが持ってきた臼ときねを使って餅つきし、納豆餅やあんこ餅にして味わったほか、京都のボランティア団体から送られた年越しそばも堪能。ビンゴ大会も行われ、参加者は楽しいひとときを過ごした。

同センターの土谷一貴さん（行政政策学類3年）は「人と会話をするのは良いなとあらためて感じた。住民の笑顔を見れてうれしい。これからも若いパワーを送りたい」と話した。

ビンゴゲームを楽しむ参加者

2011 年 12 月 28 日　福島民友新聞

福大生と住民

餅つき楽しむ

福島の仮設住宅

福島市宮代の仮設住宅で、ボランティアの大学生と住民らが餅つきなどを楽しむ「望年会」が開かれた。仮設住宅の支援活動などに取り組む学生団体「福島大災害ボランティアセンター」が企画した。

学生ら7人が住民らと交代で餅をつき、集会所に集まったお年寄りら数十人に振る舞った。

同大3年の土谷一貴さん(21)は「若い世代が訪ねるとお年寄りも活気づく。これを住民同士の交流につなげていきたい」。住民の大村弘さん(70)は「餅つきなんて何十年ぶり。若い人と楽しめました」と笑顔だった。

仮設住宅で餅つきをするボランティアの福島大生と入居者たち＝福島市

2011 年 12 月 31 日　朝日新聞(福島版)

2.1.22 報

ボランティアの僕たちは逆に、
被災者の笑顔に勇気と元気をもらいました。
これからの福島に必要なのは、
その**笑顔と助け合う社会**だと思います。

福島大学の福幸

福島大学の活動母体は、震災を機に設立された「災害ボランティアセンター」の学生たち。福島を元気にすることを目的としたグループで、被災地および被災者へのボランティアを行っている団体です。

彼らは避難所運営のサポートから仮設住宅支援、新地町や相馬市など津波被災地での支援活動、さらには首都で開かれた「学生復興ネットワーク」のシンポジウムに出席、全国の大学に被災地の現状を伝え、ボランティアのより円滑で効率的な活動をサポートするなど精力的に活動しています。

そんな彼らの胸に強く刻まれているのが、被災者たちの助け合う姿と触れ合いの中で生まれた笑顔だと言います。そして、これからの福島の幸せを考えたど後にたどり着いた結論は、次の4項目でした。①子どもに愛されるふくしま②助け合うふくしま③つながり合うふくしま④人が出会うふくしま――。

彼らは人と人がつながり合い、助け合うことで「幸せ」を感じるのでは、とボランティア活動を通し感じたと言います。この想いを全県で掲げ、「共に立ち上がりましょう!」というのが彼らの提言です。

今回の活動を通じ学生の一人はこう話してくれました。「僕たち学生にも復興のアイデアはある。実行する時間もある。でも、活動資金が十分ではありません。企業には時間はないかもしれないけど、資金があるぞ。僕たちの活動の中には参加したFMD委員会の方から資金を援助してもらい実現したボランティアもありました。そのように学生と企業が手を結べば、復興のためにもっと新しい何かができるかもしれない」。そんな彼の言葉に、またひとつ復興へのヒントがあるのかも知れない。

2012 年 1 月 22 日　福島民報新聞

足湯で本音 話してね

新潟県中越沖被災 福島大生がボランティア

2012.2.1 毎日・夕刊

07年の新潟県中越沖地震で自宅が全壊した福島大2年、大矢直輝さん(20)=福島市=が、学生仲間と共に仮設住宅の高齢者に足湯サービスを続けている。約1年間の仮設暮らしを経験し、祖父の認知症が進むのを目の当たりにした。東京電力福島第1原発事故をきっかけにボランティアを始めた大矢さんは「お年寄りの本音に耳を傾け、寄り添いたい」と笑顔で話す。【山本太一】

昨年3月の東日本大震災の2日後、新潟県柏崎市の実家に避難した。だが、友人が避難所で炊き出しを手伝っている姿をインターネットで見て、「人の役に立ちたい」という思いが募った。大学が5月初旬に再開するのと同時に自宅に戻り、大学の災害ボランティアセンターに登録した。

それ以来、センターの学生仲間数人とほぼ毎週末、ボランティアに励んできた。津波被害が大きかった福島県南相馬市など沿岸部で、民家の泥出しや支援物資の配給を手伝い、寒さが厳しくなるのに合わせ、福島市などの仮設住宅の高齢者に足湯サービスを提供している。

事前に用意しておけやコンロを仮設内の集会所に運び込んで湯を張り、血行が良くなるようもみほぐす。つえを使うお年寄りにはそっと手を添える。

じいちゃんと同じような人を出したくない…

一番大切だと思うのはコミュニケーション。1人暮らしの高齢女性から「夜、一人になると不安で泣いてしまうの」と打ち明けられたことがある。「自分から聞き出すのではなく、相手が自発的に話してくれるのを待つ。つらい経験を人にばかり。祖父母と両親、兄との仮設暮らしは壁が薄いため声が漏れやすく、ストレスがたまった。約1年後に建て替えた自宅に移ったが、80代の祖父は認知症が進んで間もなく亡くなった。家族で「何十年も守った家が壊れ、ショックを受けたんだ話すと気持ちが楽になるから」と語る。

高校1年の時、中越沖地震で柱や土台が崩れて自宅は全壊した。その3年前の新潟県中越地震で崩れた壁などのリフォームを終えたばかりの自宅に住んでいる。

寒さが染みる福島の真冬の仮設住宅。「じいちゃんと同じような人を出したくない」。その一心から足湯でお年寄りの心と体を温めている。

仮設住宅の集会所に足湯ボランティアとして訪れお年寄りの手をマッサージする、中越沖地震被災者で福島大学生の大矢直輝さん=福島市飯坂町で、武市公孝撮影

2012 年 2 月 1 日　毎日新聞・夕刊(福島版)

7-2.（学生団体）福島大学災害ボランティアセンター　収支決算報告

2012 年 1 月 31 日現在

Ⅰ収入の部

項目	金額(円)	備考
運営費	1,499,195	スタッフからの参加費 福島大学行政政策学類自治会学友会 一般社団法人　Think the Earth ルーテル教会 キャンパスライフ活性化事業
サマーキャンプ	2,680,679	日本イラク医療支援ネットワーク(JIM-net) 三重学生災害支援団体「Team M」 京都市社会福祉協議会の有志
芋煮会	72,215	住民参加費 学生参加費
学祭	40,105	
大望年会	254,553	㈱オーマ（Ready for?） 住民参加費
合計	4,546,747	

Ⅱ支出の部

項目	金額(円)	備考
運営費	1,044,777	文房具、名刺、インク、切手など
サマーキャンプ	2,680,679	交通費、宿泊費、色紙、名札、網など
芋煮会	72,215	調味料、スポンジ、洗剤、飲料、薪など
学祭	40,105	調味料、肉など
大望年会	67,539	調味料、しゃもじ、バケツ、鍋借用代など
合計	3,905,315	

収入の部　　4546747
支出の部　　3905315
次年度繰越　　641,432

上記の決算報告について監査の結果、適正に決算が行われていることを確認しました。

8. おわりに

2011.3.11。

あるメンバーは一人暮らしの自宅にて、あるメンバーは沿岸部にて、またあるメンバーは、どこか遠いところで、同時に“震災”というものに直面しました。津波の混乱のなか、福島県においては、さらに深刻な問題がおこりました。――原子力事故発生。沿岸部は、津波の被害に加え、放射能という目に見えない恐怖とも戦うことを余儀なくされたのです。沿岸部に住んでいた人は、次第に中通り地方、会津地方、または県外へと避難を始め、いよいよ福島県は混乱と不安で苦しい状況に立たされたのです。

そういった状況の中、福島大学から有志の学生が立ち上がりました。福島大学災害ボランティアセンターの原点ともいえる活動、避難所運営です。福島大学避難所、あづま総合運動公園体育館、ビックパレットふくしま…県内各地の避難所で、学生が必死になって活動していました。あくまで学生という視点で、かつ実効的に、被災者支援に全力で取り組みました。被災した現実、震災の恐怖というものを実感した場でもありましたが、その中でしか感じることのできない、生活のありがたみ、人のつながり、優しさ、ぬくもりを感じることが出来たのも事実です。あわただしい日々の中で経験した初めてのことでしたが、決断力と実行力で動くことの究極がそこにはありました。

避難所閉所とともに立ち上がった、「学生団体　福島大学災害ボランティアセンター」。発足と同時に様々な活動をしてきたのだなと改めて感じました。

津波被災地にも直接出向き、震災の現実を肌で、その目で知ることもできました。仮設住宅にも訪問し、住民の生の声をより身近に聞くことで、何が必要で、何に苦しんでいるのか、暮らしはどうで、つらいことは何なのか等々、親身になって気持ちを汲み取ることもできました。子どもが抱える深刻な問題、放射能による心的ストレス、不安、保護者の心配など、避難してきた方と直接かかわることで見えてきた現実もあります。福大ボラセンでの活動で、より身近に震災を感じることが出来たのではないでしょうか。

そのような支援活動の中で、明るい話題もありました。仮設住宅に入ると、まるでわが子（孫）のように接してくれるおばあちゃんや、あーだこーだ言い合って、学生と楽しそうに話すおじいちゃん。無邪気な笑顔で、楽しそうにはしゃぐ子どもたち。支援の回数が増えるほどに、そういった場面に数多く出会えるのが、本当にうれしくてたまりませんでした。

福島県は、放射能の関係もあって、おそらく 20 年、30 年は支援が必要になると考えています。今後求められるのは、地道でも、継続性を持って生活支援を続けていくことと、次世代への継承であるように思います。まだまだ震災で苦しむ人がいる。そういった人々が少しでも前を向いて歩いて行けるように、そして、自分たち自身も次のステップへと進めるように模索しながら、福島県全体として復興へ近づけるように、学生としてできること、

今後もその可能性を信じて活動していきたいです。

最後になりましたが、私たちと一緒になって活動、あるいは後方支援してくださいました各大学学生、大学関係者様。活動について詳しく取り上げ、あらゆる媒体で広報してくださいました各メディア関係者様。活動協力に加え、報告書作成にあたりご執筆くださいました各団体、個人の皆様。印刷・製本を引き受けてくださいました株式会社山川印刷所様。本当にありがとうございました。ご協力くださったすべての方々の名前を列挙することが出来ず大変申し訳ありませんが、皆様の支えがあり私たちはこのような報告書を作成することができました。心から御礼申し上げます。

今後とも私たち「学生団体福島大学災害ボランティアセンター」をよろしくお願いいたします。

2012 年 3 月吉日

学生団体　福島大学災害ボランティアセンター

センターマネジメントチーム　土谷 一貴